
サイコ・ノーヴァ

異邦人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイコ・ノーヴァ

【Nコード】

N2938J

【作者名】

異邦人

【あらすじ】

頻繁に奇妙な夢を見る少年高宮恭平。

彼の背負った寂しい過去と、現在を描く長編連載作品です。

海と夢

それは海の匂いだった。

温度のない、どこまでも淡い海。

誰もいない浜辺に恭平は立っていた。

波は黒い色をしていて、その音は時に彼を懐かしく、そしてまた、煩わしくさせた。

夢を見ていたことに気付かないことはよくある。

目覚めたときは覚えているが大抵、朝の喧騒に飲まれている内に忘れてしまう。

だが、繰り返し同じ夢を見続けた場合はそうではない。

高宮恭平は最近、広く寂しい砂浜に一人で立っている夢ばかり見ていた。

何故そのような夢を見るのかはわからなかったが、決して好きにならない、そんな種類の孤独がそこに

確かにあって、その度、言いようのない不安に駆られるのだった。

部屋に差し込む薄明るさで、彼は予定より早く目が覚めたことを感じた。

背中にシャツが張り付くほど汗をかいている。起きるには早すぎる時間だったが、

こんな状態のまま寝ているのは耐えられそうになかった。窓を開けていても寝苦

しいし、寝ている時まで団扇は仰げない。だからといって恭平は夏を嫌いにならなかつた。

彼にとって一番大切な思い出が、幼い夏の日の中にあるからだ。

或る夏の八歳の日、家族で遊園地に出かけた事がある。

彼には病気がちで、一つしか年の変わらぬ妹がいた。

彼女は普段病院から出られなかったのだが、その日は特に体調が良かったために外出許可がおりた。

彼女にとつては全てが初めて見るものだった。

父に手を引かれて、むせ返るような道を幼い兄妹が歩いて行く。

その姿は、周りの多くの家族連れに溶け込んでいるようで、恭平はその事を感じて密かに微笑んでいた。

メリーゴーランドの白馬にしがみついて、少しベソを書いていた妹の顔が、今も彼の胸に残っている。

彼女を生んですぐ母親は亡くなった。

出産に耐えられないような要素は何一つとしてなかったが、そつという現実だけが、ただ慥然と居座っていた。

母が亡くなった後、物心つくまでは、父方の祖父母の家で育てられることになった。

父親は、妻を失くしたショックで、焦燥仕切っていたし、妻がその命の代わりに遣した妹は

彼にとつて、連れ子で血の繋がらぬ恭平よりも優先されるものらしかった。

祖父は恭平を愛してはいなかった。

ことあるごとに、何故他人の子を面倒見なければならぬ、などと平気で口にした。

ちよつとしたことで叱られているうちに、恭平は思ったことを口にしないうちにもなった。

絶えず人の機嫌を伺わなければ生きて行けないような、そんな日々
の始まりだった。

近所は、子供たちの遊び場になるような自然に溢れていた。

特に、駄菓子屋から坂道を下ったところにある小川に子供達はよく
集まった。

恭平は家事の手伝いが終わると毎日のようにそこへ出かけた。

子供たちの輪の中心から少し外れたところに構えるのが、恭平の
いつもの場所のとり方だった。

自分が遊ぶより、ほかの子供が遊ぶのをそつと眺めているような子
どもだった。

田舎の子供というのは人懐っこく、時には恭平にも交わろうともし
てきた。

その日は、活発そうで、よく日焼けした少年が話しかけてきた。

「そんなところで見てないで、こっちで一緒に魚でもとろう」

「いや、いいよ、こうしてるのが好きなんだ」

「変なやつ。ほら、いいからこいよ、じつと見てられたらなんか気
持ち悪いし」

「ごめん、そういうことならもう帰るよ」

彼自身には、自分が何故そんな言葉を口にしてているのか、実のこ
ろよくわかっていなかった。

遊びたくないわけではなかった。

彼の心は、気づかぬうちに、人と交わることを恐れていたのだった。

恭平は、極偶に父に連れられた時にしか、妹に会えなかった。

初めは一般の病室だったのだが、周りの子供が退院していくのに、

自分は何故そうできないのか
と涙ながらにうったえたことがあったので、程なく彼女は個室で過
ごし始めた。

父親は夜にしか現れない、ましてや会いに来られない日も多かった。
少女にはた

だ寂しい数年間だった。窓から見える変わらない景色だけが、彼女
の所有物だった。

ある日、近所の駄菓子屋で買ったソフトビニールの人形をお土産に
持っていったことがある。

妹は、小さくありがとうと言った。次に会った時には持っていなか
ったので、どうしたのかと聞いても

答えようとはしなかった。

例えば、駄菓子屋という場所を想起させるものを与えたのは浅はか
だったのかもしれない。

彼女は、そこに行きたくても、行けない日々を送っていたのだから。

二人は漠然とした兄妹だった。

妹なのに、会うことは近所の子供よりも少ない。

だからなのかわからないが、造詣の美しい彼女に恭平は幼い恋心
を抱いていた。

それが決して口に出来ないことは子供ながらもわかってはいたが。

父は、妻を亡くしてからというものの、会社でも事務的な会話しかせ
ず、

生活が落ち着いた後も、再婚はしようとしなかった。

週末には田舎に帰ってきて、恭平を連れてよく海に行った。

泳ぐことはせず、防波堤からただ水面を眺めていただけの寂しい背
中に、恭平は日々の鬱積を

ぶつけることは出来なかった。

そして十年前の二月七日の二十一時、東京で大地震が起きた。

観測史上最大級のそれは、人間が作った文明を容赦なく薙ぎ倒した。震源は病院のある辺りだった。頑丈な鉄骨を押し折った地響きは、その日、恭平から父と妹を奪った。

思えば、夢に出て来る海は、その田舎の海に似ているのかもしれないと

恭平は思っていた。

今日は二学期の終業式で、午後からは暇だから気晴らしに街に繰り出そうと決める。

そういえば、好きな作家の新刊が発売されていたな、などと考えている内に

嫌な感情はなりを静めていき、彼は悪くない気分でベッドから身を起こした。

居間に行くと、スーツ姿の女が煙草を吹かしていた。

「あれ？今日は早いねー、どうかしたの？」

「暑くて目が覚めたよ。もう仕事なの？」

「そうだよー、最近キツくてさあ、悪いけど今日も会社に泊まるわ」

「いいよ、気にしないで。コーヒー淹れるけど飲む？」

「いや、もう行かなきゃいけないから……。ん、でもせっかくだからもら

おうかな」

「じゃあすぐに淹れるね」

やかに火をかけて戻ってくると、女は苦い顔で新聞を読んでいた。

「うわ、これこの近所じゃない。気持ち悪いわね」

どうしたのかと思い、彼女の新聞を覗き込むと、どうやら近所で飼

い犬が殺され

るといふ事件が多発しているようだ、それも猟奇的な方法で、だ。

「恭平くん、私がないからって、遅くに出発いちゃいけないよ。

あと、戸締り

はきっちりしておいてね」

「ああ、わかっているよ。千尋さんこそ気をつけてね」

「そうね、それにしても最近物騒ね。昔は一年中玄関開けっ放しにしてて

もあまり心配いらなかったらしいわよ」

「いや、それもどうかと思うけど・・・」

千尋は恭平の父方の叔母に当たる。

田舎で恭平達と一緒に暮らしていたが、彼女の父親、つまり恭平の祖父が亡くなった

後、恭平と一緒に東京にやってきた。

根が明るい女で、あまり物事を引きずらない性格だった。

彼女は恭平のことを昔から可愛がってくれていて、彼女という存在がなければ、幼い少年の心は

すり潰されていたのかもしれない。

恭平にとっては、母のような、姉のような存在だった。

「それじゃあ、行くわ。悪いけど後片付けしておいてね」

そう言っつて、慌しく出て行く。

彼女は低血圧とは無縁のようだった。

千尋のいない家は、恭平にとってはむしろ日常の一部だった。

毎日遅くまで仕事潰れの彼女には、恭平と一緒に過ごす時間もなかった。

テレビをつけると、すぐに賑やかな声を流してくれる。

自分もそこにいるような気分になりながら、彼は残りの朝食をたいらげるのだった。

海と夢（後書き）

拙い文章ですが、読んでいただけて幸いです m () m

夏と日常

ミンミンミンミン、ミンミンミン

都会のアスファルトからどうやって這い出てくるのか、蝉の音が暑さに拍車をかける。

恭平の通う高校は徒歩で四十分ほどの距離にあり、その道程のほとんど

が坂道である。流石にうなだれるような気分になりながら歩き出すとすぐに一人の女に呼び止められた。

「高宮先輩。お早うございます。」

静かなしゃべり方だが、それでもはっきりと聞き取れるくらいに濁舌は良かった。

少女は、倉田深奈という。

昔、妹と同じ病院に入院していて、二人の数少ない友達の一人だった。

恭平たちが東京に越して来て、挨拶に回った近所の一つが偶然深奈の家だったのだ。

年月が経っていても、お互いを忘れるようなことはなかった。それでこそ友達だ、と恭平はその日思った。

「お早う、わざわざ待ってなくてもいいのに。こんなに暑いんだから」

「あの、もしかして迷惑でしたか？」

「いや、迷惑じゃないけどね、暑い中待つのがつらそうに見えたから」

「心配無用です。ところで、今日の放課後、少しいいでしょうか」「ん、別にいいけど何かあるの？」

「はい、詳しくは放課後改めて話しますので放課後図書館の入り口に来て下さい」

どうしてもすぐに用件を話さないのか多少気になったが、大して気に留めるようなことでもない。

二人は陽差しの強い坂道を上り始めた。

「死ねよ、カス」

「ゴミは学校くんな」

上畑信二の携帯にはよくこんなメールが届く。誰から来たのかはわからない。信二は

家族以外のアドレスなど殆ど知らない。

最近彼は生きることに何の利点も感じないようになっていた。

心を閉ざせる程器用にもなれず、心無い言葉を浴びせられる度に深く傷付きながら、それでもどこかで人間というものを信じたがっていた彼は、それ

れも限界が近いとぼんやりと感じ取っていた。

人間を信じたがっている一方で、自分と無関係に笑っている人間がとても憎くなる

時間があった。

そして、時々そんな狂気から我に帰ったときに、無関係の人間を傷付けたがっている自分に気づき、呆れ果てるのだった。

今朝は学校に着くなりこの調子である。

だからといって、どうしてよいのかはわからなかったので、ぎこちなく繕っている。

「何ヘラヘラしてんだよ、気持ち悪いんだよゴミクス」

そんなメールが再度信二の携帯を震わせる。

携帯電話は、信二にとって持たなくてはならないものだった。彼の母親が先日脳出血で倒れた。緊急で手術が施されたが、未だ意識が戻ることはない。

このまま植物人間になってしまふ母が彼にとっての現実だった。だが、そんなことを信じることはできない。

いつか、意識を回復して、その連絡が来る、その日だけを待っていた。

「上畑のやつ、また携帯見て沈んじゃってるぜ、ああいうやり方、あんまりだと思わねえか？」

恭平が教室に着くと、彼の近くの席の男子がそう話しかけてくる。何故自分にそんな意見が求められるのだろうと、彼は思う。

気の毒に思わない者など、まともな神経をしている者ならば、いる筈がないのに。

自分と同意見の者を探して、見つけて、それで満足しているだけなのだ、この手の連中は。

話題は、何も上畑のことでもなくてもいい筈だった。ただ自分の言うことに同調してもらうことだけが目的なのだから。

「ああ、思うよ」

そして、だから恭平はそう短く返す。

「ところで、二限の英語の宿題だけど、訳に自信ねーんだ、悪いけど参考に見せてもらっていいか？」

「どござ」

ほら、もうさっきの話題がおわってしまった……、まあ、こんなものだ、所詮他人なんてどうでもよいのだ。

そう結論付けて、窓の外に目をやった時、朝の教室に怒声が響き、恭平を含め、クラス中の視線が

その元へと集まった。

「いいっ加減にしなさいよ！！誰だか知らないけど、いつまでこんな真似を続けるつもりなのよ」

声の主は、進藤香奈枝という、勝気で通っているクラスメイトだった。

「いるんでしょ？この中に！！隠れてないで、出てきなさいよ！！」と、彼女は続けたが、それで犯人が名乗り出るわけもない。

怒りに任せて大声を張ったものの、それが空回りしているような気がして、彼女はフン、と鼻を鳴らして教室を出て行った。

早速、彼女の様子を真似して、小馬鹿にしている連中がいる。下らない、下らない。

恭平は、すぐに興味を失ったように、窓の外に視線を戻した。

少年と少女

全ての授業が終わる。

今朝の約束を思い出して図書館に向かう。所詮は他人事である。

自分から積極的に関わろうとしないことにほんの少しの罪悪感を感じながら、自分の

の立ち居地を保持する選択をした。

図書館の前では既に今朝の少女が待っていた。

「あ、先輩。じゃあいきましようか。」

「まだ行き先も聞いてないよ。どこに行くの？」

旧校舎です、ときもなげに言う。

「そこは立ち入り禁止じゃないか。なんでそんなところに。」

「ちょっと立て込んだ話ですから。」

それで何でわざわざ旧校舎なんだと思ったが、何やら急いでいるよ
うなので深くは問わないことにした。

旧校舎は夏休みの間に工事が入って取り壊されることになっている。
老朽化が進み、荒れ放題である。

十秒歩かないうちに蜘蛛の巣に絡まって、恭平は渋い顔になった。

夕暮れの、橙と黒に染まった古い教室に二人は入った。

「で、話ってなんだい？」

「先輩、近所で犬が殺された事件知ってますか？」

「ああ、今朝新聞に載ってたね、君も気を付けてね」

そう言われちゃうと言出し難いんですが、と前置きしながら手近
な机に尻を置く。それから、

「……先輩、私と一緒に犯人捜しをしてくれませんか？」

と言った。

「は？」

と思わず聞き返してしまう。

何故、警察でもないのにそのようなことをしなければいけないのか、
第一、

危険すぎるではないか。

「あのね、深奈、俺にはどんな意図でそんなことを言っているのかわからない
んだけど」

「これを見てください。」

と手渡されたのは、四つ折にされたコピー用紙だ。

「それ、今朝ポストの中に入っていたんです。」
中を開くと。

「こんげつはあなたがたのいのちをもらいます」
と書いてあった。

恭平は、その文字が訴える異常さに身震いした。

文章の異常さもさることながら、それ以上に一つ一つの文字自体が
奇怪なのだ。

手書きであるが、大きさはばらばらだ。そして、何で書かれたのか
判別できない色。

赤黒いその色は血で書かれているようにも見えたが、どうやらそれ
も違う気がした。

夕暮れの廃教室でこんなものは見たくなかった。

「これって……」

恭平は思わず息を飲んでしまう。

「気色悪いでしょ？」

「でも、これだったら流石に警察も動いてくれるんじゃないの？」

「それは、そうなんですけど……でも、ほら、最近信用できないじゃないですか。」

それに、任せっぱなしなのも嫌だなと思って」

警察が信用できないのは、マスコミがそう煽るからだろうと、内心ため息をつく。

「それで、俺？」

「先輩なら大丈夫です。絶対に上手くいきます」

「何の根拠があつてそんなこというんだい？俺は素人だよ？そりゃ君の事は心配

だからできるだけのことはしようと思うけど。」

「先輩が知らないだけで、ちゃんと根拠があります。それが何なのかは言うわけにはいかないですけど」

「何だそりゃ。一応巻き込んでるっていう自覚ある？」

太陽は、己が沈むその時までアスファルトを焼き続ける。

放射熱でむせ返った道を二人は並んで歩く。

「それで、犯人探して、どんなことをするつもりなんだい？」

「近所の犬殺しの犯人と同一人物なのは間違いないと思います。こんな異常者が近所に何人もいちゃ堪りませんし」

「まあ、そうだな。それで、刑事の真似事でもやるうっていうのかい？」

「当面、そうなりますね。」

「ふうん、それで捕まえられると思う？というか、かえって危険なんじゃ？」

「あんな手紙を届けられた時点でこれ以上ないくらい危険です。

それなのに、ただじつとなんかしていられませんよ」

「まあ、いいけどな。」

そもそも素人だけで犯人を捕まえてしまおうということに無理があ

る。

それでもいざというときは、自分が盾になればいいだろう、とぼんやり思っている。

それを偽りや無謀と理解できないのが、今の高宮恭平という人間だった。

彼は、自分の命を軽く考える傾向があった。

父と妹が死んだ日、恭平は自分の魂が抜けて、空に溶けていくのを感じた。

それから、感情が少し希薄になったような気がする。

死ぬことも、生きることも怖くない。

彼の今の日常には、ただ静けさだけがかった。

恭平は、先程からの深奈の話し振りに違和感を覚えていた。

本人は当事者で、事態はもっと深刻なはずなのに、どこか軽い様子なのだ。

彼女は、この状況を楽しんでいるようにすら感じられた。

「深奈さ、犯人を捕まえるとか言ってるけど、怖くないわけ？相手は異常者だよ？」

「そうですね、だけど大丈夫だと思ってます。だって先輩が一緒ですから」

「なんで俺と一緒にだと大丈夫なのさ……。俺そんなに強く見える？」

「いいえ、強くは見えませんね、普通くらいだと思います」

「だったらなんで安全なのさ。正直全くわからん」

「ふふ、いいんですよ。それより、断られなくて、私、感動してます」

「断るわけないだろ。君が危ないっていうのに」

「そういうことをちゃんと私の目を言えるって、尊敬します」

「フ……。惚れるなよ？」

「惚れません」

「そ、そうか、そうはつきり言われると残念だ」

おどけて見せたところで、それきり会話も続かなかったのだが、帰路も終盤に差し掛かり、いつも二人が別れる角道で、ふと深奈が口を開いた。

恭平は、今朝からの深奈を見て不思議な気分を味わっていた。

本来の彼女は非常に寡黙で、自分から喋ることなどほとんどなかったからだ。

彼女もまた、心を閉ざした人間なのだから。

特に理由も言葉もないが、なんとなく寄り添っている、そんな関係だった。

狂気と夜

「そういえば、先輩のクラスにひどい虐めがあるそうですね」

「ああ、下の学年でも有名になるくらいなのか。タチが悪くてさ、ほら、メールの差出人を変えて送るサイトあるだろ？」

「ありますね。厄介なものです。コンピューターウイルスもそうですけど、ああいう百害あって一利なしなもの、どうして作るんでしょうか。そういう人、嫌いです」

「ああ、俺も嫌いだ。って、話が逸れてるじゃないか。それでね、そのサイトを使ってメールが送られてるらしくて誰が犯人なのか、わからないのさ」

「本当、タチが悪いですね……、大丈夫かしら？」

「大丈夫って何が？」

「んー、その虐められてる人、早まったことをしなかなあと思っ
て」

「……そんなことにはなって欲しくないけどな」

「誰が犯人かわからなきゃ止めようもない、か。 可哀想ですね」

「誰かが、そういう役目を負わなきゃならないのかも」

「え？」

「俺だって、そんなの認めたくないけどさ、みんな自分より下に
いるやつが欲しいんだよ。だから、何かで劣るやつを見つけては
吊るし上げるのさ」

「そういうこと、言わないで下さい」

「……ごめん。だけど、」

「やめてー！」

深奈は叫んでいた。

二人の他は誰もいない、騒る道の上で、恭平はただ、沈んだ太陽の
ようにひしがれていた。

大声を出されるのが、幼少期の頃を思い出させるから、苦手だということとは、深奈も知っている筈なのに……。

それと同じくらい、触れてはいけない彼女の部分に近づいてしまったのだろうか、と彼は自分に言い聞かせた。

「わかった。もう言わない」

「そう、もう決して言わないで。私の前でなくとも」

「なんで、そこまで。」

「お願いです。それで傷付くのは、私だけじゃないんです」

「……確かにそうかもしれないね。わかった、気を付けるよ」

自分の価値観を他人に認めてもらうことは、一種の賭けだ。

それが成功した時の快感を求めるのか、失敗した時のやるせなさを恐れるのか。

そのバランスを上手くとっていくのが思春期において、難しい。

恭平は、この場合失敗した。

彼は、普段の自分ならば、例えば相手が深奈であっても、自分の考えを積極的に話すことなどない筈だと、訝しんでいた。

相手に拒絶されることを極端に恐れているのは、彼も自覚している所だった筈だ。

やはり、今日はなんだかおかしい日だ、と彼は思う。

深奈と別れた後は、また音のない時間が始まる。

それは、波紋のない、沼の水面のように、静けさと、不気味さが同居する世界だった。

もう陽も沈みきった闇の中で、彼の思考は止まっていく。

その状態のことを自動操縦と彼は名付けていた。

何も考えなくても、体は勝手に動き、いつもの作業をいつもの通りにこなしていく。

呼吸をするように、物事が仕上がっていく。
その淡々とした状態の中で、彼の意識が彼のものではないような錯覚に囚われることすらあった。

だが、その夜は、彼にとっては楽なその状態を維持することは許されなかった。

早速、深奈が押しかけて来たからだ。

「先輩、さあ、行きましょう」

「もう夜だよ、補導されても知らないよ？」

「補導……って、そんな状況じゃないのはさっき話したでしょうが!!」

「う、うん、ごめん、行こう。……冗談だったんだけどな」

「はあ……、まあいいです、付き合わせてるのは私の方ですしね」

恭平は、夜出歩かないようにという、今朝の千尋との約束を破ることを内心で詫びてから、玄関を出た。

外は、夏らしく、風もなかった。

街灯の明かりを頼りに、闇の中を進んでいく。

深奈の意向に沿って、差し当たっては犬が殺された家を周っていくことにした。

2

「それで、何を調べるの？」

「何か痕跡がないかと思ひまして。」

深奈が言うには、犯人が確実に居たと思われる場所を探していけば、

何かしら特定できる要素がある、とのことだ。

正直推理小説の読みすぎなんじゃないかと思う。

現実には、解決せず、迷宮入りしてしまう事件の方が多いのだ。

よくわからないが、ここまで目立つ犯罪を好んでやる人間ならば、或いは素人ですらわかる跡が残されているかもしれない、といったところなのだろうか。

「痕跡・・・ねえ。俺は周りを見張ってるから、頑張っ探してくれ。」

深奈には、多少皮肉を込めたその言葉も、もはや耳に入っていないようで、何やら真剣に地面を覗んでいる。

犯行予告めいた手紙が届けられたのだ、そうすることで不安を和らげられるのなら、好きにさせておこう、そう考えて、黙って傍に立っている。

「・・・今日のところは引き上げましょう。明日もありますしね」

「ああ、わかったよ。それで、何か手掛かりは掴めたのかい？」

「そんなにすぐにはわかりません。それと、今度からはばーっと突っ立ってないで、一緒に探そうとするフリだけでもしてください」

「・・・あ、ああそうするよ」

探せと言われても無理な話なのだが、一応はそう答えておく。

彼女はまだ何か言い足りないようだったが、諦めたのか、少し頭を振ってから黙ってしまふ。

彼女にとって頼れる者が自分しかいないのであれば、確かに今日の態度は少し冷たかったのかもしれない。

明日からは自分も本腰を入れようと思った。

深奈の家とは目と鼻の先なのだが、一応送っていくのが筋というものだった。

彼女を送り届けた後、ふっ、と、このまま家に戻りたくないような気分が湧き上がった。

辺りは耳鳴りがする程静かで、そんな町の表情は、彼の心によく似

ている。

幸い、家には誰もいないし、どれだけ遅くなったとしても明日は休みである。

心の任せるままに、行きたいと感じる場所に行ってみよう、そう思った。

こういう風に歩くのは、旅行をするということと同義だ。

見知った町のはずなのに、気分は歩を進める度新鮮になっていく。金のかからない遊興だ、と短く笑う。

どンドン、と恭平の足取りは軽くなっていった。

たとえば、二手に分かれた道があったとしたら、なんとなく進みたい方を選んで歩く。

そんな、「なんとなく」を繰り返している内に、気付けば駅に着いていた。

知らない小道ばかりを通ってきたので、駅に着いたのは偶然だと言つてよいが、冷静になってみると、帰り道に困らないのは運がよかった。

何故、自分にそんなわけのわからぬ衝動が起こったのかはどうでもよい。

数年ぶりに見上げると、電線で区画された、狭く濁った星空が映ったが、そんなものでも美しいと思った。

そのまま家に戻ると、夕食もとらないまま床に就いてしまった。

幼馴染の命が危険に晒されているというのに、よくもそんな気分になれる。

そう責めるような声が彼の脳裏に響いていた気がした。

翌日は、例の、海に佇む夢は見なかった。

居間にいくと、千尋がひっくり返って寝ていた。

余程疲れていたのか、スーツから着替えてすらいない。

そっと薄布団をかけてから、これからのことを考える。

昨日は自分はどうかしていたのだと、彼は思った。

素人二人で探し回ったところで、現実には殆ど進展しない筈なのだ。その場の気休めで放置しておいてよいことではない。何か他の方向で出来ることがあるならば、まずそれをやるべきだ。

無闇に探し回るよりは、身边を警戒してなるべく家にいたほうが良いに決まっているということもある。

深奈の話ではもう警察には届けたということだし、それで気が済まないというのなら、他に観察力に優れた人間、例えば探偵などに依頼するほうが余程身の安全を保てる。

そう、初めに思ったではないか。

相手の言うままにだらだらと付き合ってしまった昨夜は間違いだった。

そう結論したところで深奈がインターフォンを鳴らした。

「先輩、そろそろ行きましょう」

「まあ、とりあえずあがれよ」

「行かないつもりですか？」

「俺は行く。だけど君は家で、直接探す他に、何か方法がないか考えておいてくれ。その方が君にとって安全だよ」

「……そう、思う？」

あさつての方向に向かってそう尋ねるものだから、千尋が起きてきたのかと思っただが、彼女は今も豪快ないびきをかいている。

ややあつてから、納得したような表情に変わる。

「わかりました。今日だけは帰ります」

「随分素直だな」

「いえ、先輩の言うことにも一理あります。私、判断力が鈍ってるのかも。」

「まあ、何かあつたらすぐ行くから」

「……ありがとうございます」

恭平は深奈が帰った後、不甲斐ない自分を殴りつける。

心に偽善が潜っていた。

何かあつたら行くでは意味がない、何かある前でなければ。

深奈を心配するようできて、本当の自分は、彼女の傍でない、何処か別の場所に立っている。

だからあんな言葉が次々口をついて出る。

自分でも認められない醜い本心を、彼女は気付いてしまつてはいないか。

そう考えると、ただ、怖くなった。

そんな気分を振り払うように、爪先を地面に擦り付けて靴を履き、そのまま家を出た。

犬が殺された家、というのは近所で噂になつていいるから、そこへ行く事自体は簡単だつた。

その家々の人間に話を聞くのが最も手っ取り早いのは間違いない。この上なく、不躰であることはわかるが、こちらとて事情が事情だと恭平は思う。

そう思つていながらもやはり気は引けるので、躊躇いがちにインターフォンを押した。

田舎暮らしで人慣れしていない恭平には、突然の見知らぬ訪問者を訝しむ視線は堪えたが、それでもなんとか口を開く。

「突然すみません、実は、こちらの家が飼い犬を殺されるといふ被害に遭つたと聞きました・・・」

「そうですが、それで、何か御用ですか？見た所警察の方ではないようですし、そういうことならお引取り下さい」

そう気怠い声で言うと、やがて玄関を閉めようとする。

「あつ、いえ、確かに警察の者ではないのですが、実は、知り合いの家にこんなものが届けられておりまして」

焦つてそう続けながら、彼は、深奈から預かつていた例の紙を差し出した。

「今回の事件と、これを寄越した人間が、無関係とは思えないんです」
やっとそこまで伝えたときには、恭平の固く握り締められた掌には、汗がじつとりと滲んでいた。

我ながら情けない、と彼は思う。

紙を手渡された中年の女性は、それを見ると表情を変える。

そして、先程よりは幾分かくだけた感じで話し始めた。

「……こういうの、家にも来たわ」

「えっ、本当ですか」

予想していた範囲内の事とはいえ、これで深奈の家に届けられた怪文書が、単なるいたずら目的のものではないことが、確定してしまった。

何処かで、結局は笑い話で済まされるような結末を期待していたように思う。

夏の暑さとは無関係な、嫌な汗が背中をつたい、恭平はぎりつと奥歯を軋ませる。

「最初は程度の悪いいたずらだと思っていたんだけど……」

「……文章も同じでしたか？」

「いえ、違うわ。記号とか、見たこともない漢字とかが、兎に角滅茶苦茶に並べてあって、気持ち悪かったわ。当然意味なんてわからなかった」

「そう、ですか。あの、失礼なことは十分承知しているのですが、それが届けられてから、どのくらいで被害に遭われましたか？」

そんなものは事例によって犯人の気分次第だ、ということはちよつと考えただけでもわかる。

だが、今はどんな些細な情報でも欲しい。可能性は低いが、何か規則性が見出せるかもしれない。

「丁度一週間後ね」

まだ根本的な事を聞いていない。

彼は、緊張と不安で潰れそうな胸をして、もう一步玄関に踏み込ん

だ。

「犯人の顔は見ましたか？」

「いいえ、見ていないわ。朝起きた時には既に、ね」

「そう、ですか。有難う御座いました。辛いことを思い出させてしまつて申し訳ありませんでした。何かあつたらまた訪ねさせていただくかもしれません」

その言葉に、夫人は迷惑そうな顔をしながら、遠慮せずいらつしやい、と残し、扉を閉めた。

拙い（まずい）、拙いと恭平は地団駄を踏みたい気分になる。

状況は、思っていたよりずっと切羽詰まっていた。

何故昨夜はあんな能天気になつていたのか、今ではまるでわからない。

話が突飛押しもなさすぎて、理解できていなかったのだろうか、或いは、この感情は虚構で、焦るふりをしながら

今も、いつものように傍観者を決め込むつもりなのだろうか、そこまで考えて、ぞつとしない気分になる。

そんなことを考えていても意味がないと、無理やり自問自答を切り上げ、次の家に向かった。

歩き回っている内に、時計が午後六時を差そうとしていた。

結果はどこも同じようなものだった。

犯人は誰も見ていないし、文章は意味のわからないものばかりである。

紙が届けられてから被害に遭うまでの時間は、数週間開いていたり、翌日だったりと不規則だ。

これでは結局、何もわからなかったのと同じことだった。

焦燥し切った気持ちで戻ると、既に千尋は仕事に出かけており、家の中には薄い暗闇が広がり始めていた。

そんな習慣はなかったのだが、恭平は、誰もいない部屋に向かって、

ただいまと、小さく呟いた。

刑事と幻想

「加藤さん、あのうるちよろしてるガキ、注意した方がよくないですか？」

エアコンの効いた車の中で、コーヒーを啜りながら、若輩の刑事が声をかける。

加藤良治は、ドラマから飛び出てきたような刑事、というのが相應しい男で、自らの勘を頼りにし過ぎる傾向がある。

しかし、不思議にも、それで成果が上がるが多く、四十に差し掛かる今まで、そんな捜査の仕方をしてきたが、そこそこ重要な事件を任され続けた。

「ほつとけ、場を荒らされるのめかなわんが、わざわざ出て行ったら張り込みの意味がないだろうが、・・・まあ、近くを通った時に一言言えはいいだろ。」

「いや、それくらい大丈夫だと思いますけど・・・あ、行っちゃいましたね」

「わかつとるわい。そんなことより、ちゃんと気張つとけよ、今度の犯人はやばいぞ」

「加藤さんがそういうなんて余程ですね」

「・・・俺もさっき聞いたんだがな、殺された犬は、どうも、素手でやられてるらしい」

「えっ、でも、ドーベルマンもいたんでしょ？」

「だから、おかしいんだよ。ほら、ちょうどここから見えるあののでかい家だ。あそこの旦那はマニアでな、わざわざ軍用でするような躰をしてやがった。もしもの時を考えろつての、まあそれはいいんだが」

「くいつ、とコーヒーを流し込んでから続ける。」

「そんなんを素手で、なおかつ、家の者が気付かないくらいの短時間で滅茶苦茶に殺せる人間っていると思うか？ついでに無傷でだ」

「どう考えても不可能ですね。というか、何らかの特殊な武器を使ったと聞かされていました」

「そう考えないと道理があわんからだ。だがまあ、そうじゃないらしい。」

「というか、仮に武器を使っていたとしても、ボウガンや銃じゃないことは確実なんだ、あんま変わんねえだろ。」

「それでいて、犯人の血液も、体毛も現場には残っていない。俺達は化け物でも相手にしなきゃならんのかね・・・」

「相方が何も言えないでいると、加藤はさらに続ける。」

「それで、だ。お前も知っているとは思いが、ヤツの矛先が動物だけじゃなくて、人間にも向き始めた。まあ予想できたことだがな」

「倉田とかいう家でしたっけ」

「そうだ。実際に被害が出てからじゃ遅いんだ。マスコミを凶に乗らせる餌になっちまうからな」

「若い刑事は、警察の体裁を気にする言葉が真っ先に出たのが気に入らなかったのか憮然とした表情をした。」

「加藤はそれを無視し、理由は不明で恐らく特殊な事情によるものだと思うられるが、既に射殺許可が出ていることを告げた。」

「まあ、俺もなんでかはわからん。普通ありえないしな・・・」

「だがよ、そんなおっそろしい奴を銃無しで連行しろって言われるよりはマシだろ」

「そして、言い訳をするように、少し暗い声でそう付け加えた。」

「既に辺りには薄い闇が広がり始めていた。」

「深奈に今日の報告と謝罪の電話を入れた後、恭平の意識は滲むようにぼやけていった。」

「気を張っている時は気付かないでいたが、夏の一日を歩き回ったことで、疲労は限界に達していたようだった。」

しかしどうにも安心が出来ず、横にはなったものの、彼は眠ろうとはしなかった。

薄暗い天井を見上げ、子供の頃には深奈の家族に、寂しさを随分埋めてもらったことを改めて思い出す。

病室に行くと、恭平の分のおやつも準備されていたり、時には玩具を買っていてくれたりした。

恭平の境遇に同情しての事だったが、彼はそれを察することが出来る年齢ではなかったし、今考えてみても、そんなことはどうでもよかった。

それよりも、そういった些細な優しさに彼は飢えていた。

深奈の母親と話をしていると、しばしば間違えて「おかあさん」と呼んでしまったが、そんなときはいつも優しく微笑んでくれた。

だが、そんな人たちが今、わけもなく殺されようとしている。

無関係の人間の平穩を脅かす、一方的な悪意というものを強く憎むことを、彼はその日覚えた。

そこまで考えた後、身を起こそうとすると、どうにも動くことが出来ない。

どうやら、金縛りにあってしまったようだ。

金縛りとは、身体は眠っているが、脳は起きている状態のことを言う。

幻覚や幻聴を伴うことは珍しくなく、血まみれの老婆がのしかかっている、などとよく聞く類である。

彼にとって初めての体験ではなかったが、面白いと言えるようなものでは決していない。

幻聴だとわかってはいるのだが、妹の声が聞こえて来るといつも悲しい思いをする。

幼いままの彼女の姿を見ると、自分だけが今、生きていることを責められるような、そんな錯覚を味わう。

俺も早くそこに行くから、と声無き声で呟いても、彼女は悲しい目

をするだけだった。

そして、今回の金縛りでも、やはり妹が彼の前に現われた。

ノーヴァ

だがしかし、それだけ言うと、彼女はすぐに消えてしまい、金縛りはそこで解けた。

仕入れた知識で、金縛りとは自らの脳内が作り上げた単なる錯覚に過ぎないとわかっていたので、彼はあまり深く考えないことにした。その後、異常なまでの眠気が彼を包み、翌日、千尋に掃除機で尻を吸われるまで目を覚まさなかった。

「服も着替えないで寝るなんてダメじゃない、というか、鍵かかってなかったんだけど？」

あまり強い調子では叱らないが、顔は笑っていない。

千尋に言われずとも、思わず自分を殴りつけたような無用心さだった、と苦虫を噛み潰したような顔になる。

「あの・・・本当に、ごめん」

「ふふ、何よ、そんなにしなびちゃって。ほら、もういいから顔洗ってきなさい」

千尋のこういうところに恭平は好感を持っている。

勘が鋭いのか、本人が本当に反省しているときは、くどくどと説教をしない。

そして、それはなかなか出来ることではない、と恭平は密かに感じていた。

「いつ帰ってきたの？」

「ついさっき。会社で仮眠してからだから、なんとか動いている感じ」

「あまり無理しないでね……。」
その言葉の後に、後は自分がやるから、と続けられない今の状況を
歯がゆく思う。

そもそも、普段の彼なら、千尋が手をつける前に、殆どの家事を終
わらせてしまっている。

千尋がそのことにもまるで文句を言わないのは、自分の過去を知っ
ていて、変に気を遣っているからではないか、と考えてしまう。

「じゃあ、出かけるから……。」

しかしそれは態度に出さず、短くそう告げる。

「何処行くの？」

「ちよつと、深奈の家に行つて来るよ。」

「倉田さんの？へえ……、むふふふ。」

「ちよつ、変な想像してない？」

「してませーん。」

「はぁ……、もういいよ……。」

千尋は完全に誤解しているが、むしろ今回に限ると好都合だ、と恭
平は考える。

自分が首を突っ込んでいる領域が、分不相応の危険を孕んでいるこ
とは、千尋には知られたくない。

行動を制限されるかもしれないし、何より、これ以上余計な心配を
かけたくなかった。

繋がりとぬくもり

視界の隅で淡い光がともり、ふと、携帯電話に深奈からの着信があったことに気付く。

「ちよつと、そんな急いで行く事ないじゃない、朝ごはん食べなさい」

「いや、今日はいいんだ、寝過ぎしちゃった感じだから……」

「あ、そうなんだ、じゃあ、しつかりね」

恭平は何をしつかりするのか、ということはもう考えないようにして、家の外に出た。

割り切ったようできて、彼の胸中は、その時も幻覚の筈の妹の涙に濡れていた。金縛りに遭うと、あの海に佇む夢を見た後と同じように、いつもこうなってしまう。

なのに、彼の様子はそんな時でも普段と変わらないものだから、いつも誰にも気付いて貰えることのない、切ない時間を過ごしていた。だから、彼自身も、自分の感情を何処か遠くに追いやって、極力考えないようにすることで、渴いた心と上手く付き合うようにしていた。

「相変わらず暑いな、そうだ、昨日電話に出られなくてごめん」

深奈を訪ねてそう口にする前から、何か雰囲気がおかしいことは察していたが、深奈も、その家族も無事であることは確認しているの

で、とりあえずいつも通りに会話することにした。

「あの……、言い難いんですけど、引越すことになったんです」

「……そうなんだ、でも確かに、出来るならそうするべきだよ。今のままじゃ危険すぎる」

「ごめんなさい、私も昨日急に言われて……」

電話の内容とはこの事だったのか、と思う。

深奈の表情があまりに暗い為、どんな事を言い出されるのかと思っ

ただけに、恭平はその時少しほっとした。

「本当にごめんなさい、勝手に巻き込んだのに、こんな形になってしまつて。それに、色々しようとしてくれていたのに」

「いや、そんなこと気にするなよ、それで、いつ引越すんだい？」

「早ければ来週には……」

恭平は、そうか、と頷いたあと、詳しく決まり次第また教えてくれるように言い、倉田家を後にした。

仕方ない、これで良いのだ、そういう類の言葉で、寂しさが波打つ胸を静めている。

人付き合いが苦手な彼には、友人と呼べる程の人間は、彼女をおいて他にいなかった。クラスの間と話をしないわけでもなかったが、関係はどれも浅く、心の根深い部分で繋がっているという感触はしなかった。

恭平は、汗が滲む背を電信柱に寄せながら、人は何故わかり合えているという実感が欲しいのだろうか、と考えていた。

だが、どれだけ考えても、その答えを見つけないことは出来ず、悶々とした時間が続くだけだった。

「あれ、もう帰ってきたの？」

「ああ、用事は済んだからね。あとは俺がやるよ」

千尋から半ば強引にモップを奪うと、 unnecessary 程力を入れて床に押し付けていく。

「ん……、やっぱり力があると綺麗になりそうだね、ありがとね、でも無理しちゃ駄目よ」

千尋はその後に小さく、色々ね、と付け足した。

恭平も、普段通りに振舞えていないことは自覚していた。

だから、勘の鋭い千尋が、それに気付けない筈はなかったし、そのことは付き合いの長い彼にとって、簡単にわかった。

しかし敢えて、そういう言い方をしてくれる。

深奈が離れていく寂しさも、どこかそれを認めたくない聞き分けのなさに呆れる苛立ちも、千尋の心地良さの中で、飴玉のように溶か

されていくのがわかる。

先ほどの電信柱での問いかけの答えは、こんな所にあつたのか、と気付くと、彼は自然と切なく、しかし優しく微笑んでいた。

「深奈さ、引っ越すんだって」

千尋は、えっ、と大口を開けて驚いていた。

「なんでまたそんな急に・・・」

「近所で犬が殺される事件あつたよね、多分同一人物なんだろうけど、何か、犯行予告みたいなのが深奈の家に届いたんだってさ」

重く圧し掛かる現実も、言葉にすれば一行で言ってしまうのかと恭平は不思議と可笑しい気分になっていた。

彼の予想通り、千尋は固まってしまっている。

そして、何やら小声で呟き、ややあつてから、それは引っ越さないよね、と口にした。

「この近所も、いよいよ危険つてことだよね」

「そうね、昨日みたいに鍵を閉め忘れるなんて、もう絶対しないでね」

「気を付けるよ。千尋さんも、仕事で遅くなるなら、会社に泊まるようにしてね、俺のことは気にしないでいいから」

その時、千尋の携帯が流行のポップスとともに震え、彼女の顔が恭平に馴染みない、仕事のそれになる。

「はい、わかりました」

幾分か気怠い顔をして彼女は、今からまた仕事に行く、と告げた。彼女を玄関まで見送った後、恭平は、自分が何故か緊張していることを理解した。

口の中がからからに渴き、心臓の鼓動が早くなる、といった生理現象が起きていた。

しかし、その理由が見つからない。

つい先ほどまで安らかな気分だった彼にとっては、それが不愉快だった。

「何だっというんだ、糞っ」

そして、理不尽な苛立ちを抱えたまま、一人だけのその日が終わっていった。

雨の中

「加藤さん、少し休憩しませんか？」

「馬鹿言え、俺の勘が今日だって言ってるんだよ、一分だって油断できるか」

濁った汗が幾筋も頬を伝い、吸いガラで溢れかえった灰皿は、重たい匂いを放っていた。

連日車を宿代わりに行っていた二人の疲労は極限に達し、少なくとも若輩の刑事の方は、現状に嫌気が差しているようだった。

とはいえ、先輩の刑事に逆らうわけにもいかず、小さな声で愚痴をこぼすのが彼の精一杯の抵抗である。

それが出来たのも、加藤が上下関係に煩くない人間であり、その事をしつかり知っていたからであるが。

「ほれ、ぼそぼそ言ってるんで集中しろ集中」

「了解つす」

街灯なしでは前もわからない程の、頼りない月明かりだった。

「明日は雨かもしれないですね」

「そうだな、お前、雨好きか？」

「好きですよ、なんだかわくわくするじゃないですか」

「まあ、そういうこともあるっちゃあるな」

窓の外を見ながら加藤は、しかし何処か遠くを見るような目をしながらそう呟いた。

「加藤さんは雨は嫌いなんですか？」

「雨の日は何もしたくねえくらい嫌いだな」

「そ、そうですか」

加藤が次に口を開く前に見慣れない背格好の人影が、彼らの車の向かいを通り過ぎようとしていた。

「ん？あいつ、この辺の人間じゃねーな、職質いくぞ」

加藤はやや後ろで腕を組んで構えた状態で待機して、若い刑事がそ

の男に近づいていった。

「あの、すみません、警察の者なのですが、今どちらに向かわれていらっしやいますか？」

男は無言で通り過ぎようとするが、そこで引き下がるようならば警察の名折れである。

若輩の刑事は、柔道で鍛え上げた大きな体で、その男の前を塞いだ。「ちよつと、今この辺で事件が起こってしまってますねえ、協力して貰えませんかねえ？」

威圧をするような語気で、そう続けた。

「家に……、家に帰るんです」

「家はどちらですかー？」

「なんでそこまで答えなきゃいけないの？」

「答えなさいよ」

「何だ、お前、偉そうに」

「いいから答えて」

「むかつく……こいつ、むかつくよ」

「ちよつと、ポケットの中を見せて下さいね」

若輩の刑事は、男の体を乱暴にまさぐっていく。

「さわ、触るな」

「見られて困るものでも持ってるのかなー？」

「こ、殺したいよ、こいつ、こいつ」

「……今のは聞かなかったことにしてあげるから、財布の中身も見せてください」

そこまで言った時だった。

加藤が後ろで何かを叫ぶ姿がちらりと見えた後、彼の視界と思考は、二度と戻ることのない暗闇に変わって、閉じていった。

銃と温度差

「う、うおあああああ」

少し生意気なところはあがあるが、見込みのある部下だった。

体重が百キロを越える彼は、容易い力でそんな事になる筈がなかった。

だがその体は、一度瞬きする間に不様に張り裂け、魂の器としての価値を失い、あちこちに体液を撒き散らしていた。

どうやって、という疑問が起こる前に、動物としての本能が、加藤に危機的状況を伝える。

彼は殆ど無意識に銃を抜くと、パニックに陥りかかった精神とは無関係に、正確に銃弾を当てていった。

リボルバーに装填された弾を撃ち尽くす迄、直感的に、しかし等間隔に引いた引き金が次々命中すると、今在る異常に比べて、実にあつけなく男は崩れ落ちた。

加藤は、その場に座り込み、この一瞬に起こった出来事を何度も反芻していた。

そして、どう報告すべきか、と考えている自分に不意に気付く。

いずれは、当然に考えなければならぬ事柄ではあるが、今がその時なのか、自分はそんなに残酷な人間だったか。

それとも、これが生きている者と、死んだ者との温度差なのか。

そんな、打ちのめされるような感覚と、蒸し暑い路地の赤黒いぬかるみ、その場に漂う匂いに、意志に反して、彼は何度も嘔吐を繰り返していた。

銃声を聞きつけた近所の人間が集まり、その場は騒然となった。

加藤の耳には、外の音は暫くよく入らず、死んだ人間達には、夏の夜の静けさを与えてやりたいと、ただそう感じるだけだった。

生臭い空気を天が嫌ったかのように、やがて雨が降り始めた。

夏なのに、それはひどく冷たく感じられて、背中から染みこんだ雨粒が、心まで深く濡らしていくようだった。

「チツ、だから雨は嫌いだって言ったんだよ……」

「現場の刑事からの報告は以上です」

無機質な顔をした女が、報告書を読み上げる。

「そんな無茶苦茶な報告があるか、目の前で同僚が死んだのに、原因もわからんとは」

対する、赤ら顔の男は、先日任命されたばかりの警察署長で、名は沖田といった。

「加藤とかいったな、そいつにここに来るように連絡してくれ」

「既に辞表が提出されています」

沖田は、開いた口が塞がらないといった感じで不快さを露にする。

「何て無責任さだ、それでも刑事か」

女は、それを無視して手元の資料をめくった。

「被疑者は、田坂祐一、32歳、住所不定無職です。死体解剖の結果ですが、薬物反応が見られました」

「……何だ、コカインか？」

「いえ、モルフィンに近い成分だという報告があります」

沖田は、大した興味はない、といった感じで、椅子に深くもたれ直した。

「どちらにしる、だ、ホームレス同然の奴が手に入れられる代物じゃないのは確かだな。背後関係はわかるか？」

「そちらは現在調査中です」

「わかった、下がってくれ」

「では、失礼します」

リノリウムの床に靴底を響かせて女が去ると、彼は独り言のように、面倒なことになった、とこぼし、少し乱暴にコーヒーを啜った。

風

恭平は、結局眠ることが出来なかった。

布団に入っても目がきらきらと冴え、半ば諦めた顔をして、買ったばかりの小説の字面だけ追っていた。

そして起こった突然の銃声に、彼の緊張は今までに経験したことがないものになった。

痛い程の心音が外に出るべきではないと告げていたが、ふと深奈の顔がよぎると、それでも、足を動かさずにはいらなかった。

追い立てられるような気分で玄関から出た途端に血生臭い匂いが鼻をつき、脂のような汗が、全身から流れ出た。

深夜の三時も回るというのに、既に路地には人だかりが出来ており、深奈の顔もそこに見ることが出来た。辺りには、人であっただろう肉が四散していて、とても正視できる光景ではなかった。

「おいつ、無事か」

「ひ、人が、ばらばらに」

「落ち着いて。君は無事なんだな？」

「わ、私は大丈夫です、でも・・・」

「わかった、もう見るな。早く家に戻ろう、ほら」

深奈の肩を押して、その場から離れようとすると、人だかりの中心に、生気を失くした眼で屈み込んでいる男を見た。

恭平は、そういう眼をよく知っていた。野次馬の中には彼を犯人扱いする者が多かったようだが、それが事実でないことは、恭平にははっきりわかった。

「あの、大丈夫ですか？」

周りの好奇と忌避が交じり合った視線が自分に向くのが感じられる。自分も深奈も早く、この毒の香りが漂う場所を離れるべきだとわかっただけだ。

だが、それでも恭平は、振り出した小雨に、濡れている男を放つて

はおけなかった。

父親、といえる程に年が離れていたわけではないが、眺めているだけで、胸が苦しくなる。

彼は、虚ろな眼をした年上の男に、やはり何処か父親の影を見つけたのかもしれなかった。

「・・・あの時のガキか、悪いけど、独りにしておいてくれないか」

恭平は知らない男から、面識があったようなことを言われて内心驚いたが、それは態度に出さなかった。

それよりも、この男はまだ誰かに触れられたくない時の中にいる、と理解することが大切だった。

「そうですね、すみません、余計な口出しをしまして。さあ、深奈、帰ろう・・・ん、どうした？」

深奈が動かないので、顔を覗きこむと、上唇をかみ締めながら、声もなく泣いている。

B級スプラッタ映画を見た後の、悪い夢のような場所は、彼女にとって衝撃が大きすぎたのか、と恭平は思った。

「そう・・・そうだったの」
深奈は誰にも聞こえない声を、恭平の向こうの闇の中へ、そっと絞り出していった。

翌朝になると、テレビニュースを見た千尋が血相を変えて居間に飛び込んできた。

「よかった・・・、無事だったわかっていても顔を見るまで安心できなかったから」

千尋は緊張の糸が解けた様子で、定位置のソファへ身体を投げ出した。

「うん、見ての通り大丈夫だよ、まあ、学校は休むことにしたけど

ね、昨夜は眠っていないから」

「それはいいんだけど……とにかく無事でよかったわ。何か食べられそう？」

「いや、今ちよつと気分が悪いんだ、でも、千尋さんを見てると、少しは眠れそうになってきたから、もう部屋にいくよ」

「ん、わかった。今日は家にいるから、ゆっくり休んで」

そこは、誰もいない海の筈だった

恭平は、波が寄せ、やがて帰っていく音に揺られて、暗い水面を、いつものように眺めていた。

ふと、遠くの浜辺に、大柄な男が座っているのが見えた。

スーツを着た男は、恭平に気付くと、はっとした顔で近づき、話掛けて来た。

「あ、あの、ここは、一体何処なんですか？」

「僕にもわからないんです」

そう恭平が答えると、その男は、体躯に似合わない程がっかりとした様子を示した。

「多分昨日の晩、だと思っんですが、気が付いた時にはここにいたんです。記憶がはつきりなくて、自分の名前さえ思い出せない状態です。せめてここから離れようと思って歩き回ってはみたのですが、いつのまにかまた戻ってきてしまう。あなたは、この辺の住人の方ではないのですか？」

「ええ、済みません、本当にわからないんです……でも」

恭平は、男の縋るような目に何故か若干の苛立ちを覚えながら続けた。

「あなたがさっき言ったように、この場所というのは、誰もが初めに居るけれど、いつか最後には戻ってくる場所なのかもしれません」
そう言ったのは、本当に何となく、そう感じたからだ、具体的な返答を期待していた相手の男は、少し気を悪くしたようだった。

「まるで、狐につままれたような気分です、他に人は見かけません

でしたか？」

「わかりません、僕もここで人に会ったのは初めてですから」

「もう少し、歩き回って見ることにします、では、さようなら」

「おや・・・、風が吹いてきましたね、どうかお気をつけて」

いつものその海にはない、潮風を感じた。

男は、それに吹かれると、煙を払うかのように、ぼんやりとかき消されていった。

「あの、どこへ、行くのですか？」

恭平は、出すまでは自分でも気付かない程大きな声で、急いでそう問いかけた。

男からの返事はなく、そこにはただ、どんよりとした重たい雲が漂っているだけだった。

恭平は、その時、きつと彼にはもう会えないだろうと感じた。

それから、何処へ、という問いを誰へともなく、いつまでも繰り返していた。

目が覚めると、いつも以上に後味の悪い感覚がした。

眠り過ぎた時のように、頭の奥が痛んだが、床に入ってから数時間も経っていなかった。

扇風機が生温い風を、ぶんぶんとかき回していた。

夢で潮風を感じたのは、これのせいかもしれない、と恭平は考える。明日からまた日常が始まるのかと思うと、もう少し休んでいたい気分だった。

そういえば、深奈の引越しはどうなるのだろうか、と思い、携帯電話を取り出す。

「あ、もしもし？今ちよつといいか？」

「はい、大丈夫ですよ、というか、やっぱり先輩も休んだんですか」

「そりゃそうだろ、平気な顔して学校行ける奴なんていないって」

「それもそうですね。で、どうしたんですか？」

「うん……、引越しただけだよ、どうなるのかなと思って」

「あ、確かにそうですね、明日学校で話そうと思ってたんですけど、なかったことになりました」

「そうか、よかった」

「先輩、昨夜は眠れましたか？」

「いや、全く。君こそどうなんだ？」

「私は、そうですね……、少しは眠れたかもしれせん」

「へえ、意外だな、ひどくショックを受けていたように見えただけ？」

「あまり思い出せないで下さい。これから、少し用事がありますから、済みませんがそろそろ」

通話が終わる頃には、先ほどみた夢の跡形は、彼の心から消えていた。

それから階下に降りて、数日前から途切れてしまっただけいつもの通りの彼の生活を、また始めることにした。

兄弟ふたり

「容疑者は、住所不定無職の田坂祐一三十二歳で
上畑信二は、そのニューズを自宅のアパートで奥歯を食いしばりながら眺めていた。このような凶行に及ぶ人間に、彼が実際出会い、会話をしたことはない。それなのに、彼はそういった人間の心理というものが理解できる筈だと感じており、それ故、田坂は、彼にとってわかりあえたかもしれない人間であると、勝手に思っていた。彼個人の考えは、こういった誰からも非難しかされない凶行の根源は、他人の無責任な冷酷さにあるというものだった。弟が、テレビの画面を見ながら、犯人が捕まってよかったね、と高い声で話しかけてきた。

「ああ、よかつたんだらうね」
少し苛立ちを含んだその言葉に、当然の如く、幼い少年は反応を示すことは出来なかった。恭平が学校を休んだ月曜日も、信二はクラスでの居場所はなく、周りの言葉に、自分の心をされるがままにしていた。

いつか、ここではない、どこか遠い世界に、誰かが導いてくれるのではないか、と勝手に想像することで、既に日常となった過酷な日々を耐え抜こうとしていた。

それは一種の宗教的な行為であったのだが、その世界観は彼が創り出したものであった為、彼にその自覚はなかった。

結局田坂は、そこへ辿り着けたのだろうか、と心配になる。

「兄ちゃん、どうしたの、ぼうつとして？」
その一声で、現実を引き戻される。

母が倒れてから、自分がその代わりをせねばならなかった。家事に疲れ果てた後では、学校の課題すら満足に出来ず、夢だった

医学部への入学も、諦めざるを得なくなった。

「……何でもない。御飯作ってやるから、食ったら寝るよ」

「お父さん、待たなくていいの？」

「いいんだよ、あんなの」

「あー、いけないんだ、せーんせいに言ってやる」

弟が、にやにやしながら、信二の周りを、円を描くように動く。

悪気はないことはわかるが、そういう無邪気さに寛容で居続けられるほどの余裕は、とうの昔に信二からなくなっていた。

「ああああああ、もう！！五月蠅い！」

色んな感情が籠った怒鳴り声だったが、それを理解できない弟は、ただ大声をあげて泣き出してしまう。

薄暗く、散らかったままの部屋でその声の波紋が響くと、信二は、どんどんと惨めな気分になっていく。

「五月蠅いんだよ、こいつ！！俺が今、どんな気分かわかるか？お前なんかより、よっぽど泣きたいんだよ、暢気にやりたくても、させてもらえないんだよ、この野郎」

相手の声が聞こえなくなるように、喉を痛める程大きな声を張り続けた。

いつしかそれは、ただの悲痛な雄叫びとなっており、やがてそれを異常に感じた隣の部屋の住人が止めに来るまでは暫く、兄弟の未熟なコミュニケーションは続いた。

悲しみと憎しみ

「先輩、遅いです」

「つて、また待ってたのか。暑いからいいっていつのに」

「そんなの私の勝手です」

車が走り抜ける音と、相変わらずの蝉の鳴き声以外なにもない、無言の坂道は、その後もずっと続いたが、それを心地よいと感じる二人だったから、気まずいと感じることは互いになかった。

深奈は、恭平に軽く手を振った後、靴箱から教室に行くまでの間、もしあのまま犯人を捜し続け、出会ってしまったらどうなっていたか、と考え直していた。

安易に恭平の協力を仰ぎはしたが、相手の男は普通ではなく、場合によっては取り返しのつかないことになっていたのだらうと思わず身震いする。

彼女は、命拾いしたような安堵と共に、ほっと息をつくくと、生徒の輪の中へ溶けていった。

その日、上畑信二は遅刻をしてきた。

教師は無能で、信二の家庭の事情を酌まずに、他の生徒にするのと同様に頭ごなしに叱り付けた。

夏のぎらぎらとした暑さで、クラス中が彼が叱責されるその姿を面白がるような、嫌な雰囲気になっていた。

昼休みのことだった。メール着信音とは違う、デフォルト設定のままの呼び鈴が教室に響いた。

死んだ魚のような目をしていた信二は、やおら慌ててそれに応答するが、その電話の内容は、無情にも彼にとって世界の終わりを告げるものだった。

母が、死んだ

携帯電話が手からこぼれ落ち、彼は薄く口を開けたまま、じんわり

と目の端に涙を滲ませていた。

電話の深刻な内容をよく知らぬ一人の男子が、乱暴に信二の肩を叩き、ドンマイ、と歯を見せた。

力をなくした信二は、肩を叩かれる力にも無抵抗で、たったそれだけのことで床に倒れこんだ。

どつとクラスから笑いが起こった。

信二の傍に進藤香奈枝が駆け寄った。

「ちょっと、大丈夫？」

今や彼にとって、他者は全て敵だった。

彼が信仰していた、自分で創り上げた神は、辛き日々耐えていたからといって、彼の母を救ってはくれなかった。

神に裏切られた失望と、床に突つ伏した痛みと、安い正義感だけの「女」に心配される情けなさ、耳煩い周りの声とが彼のぱんぱんに膨れ上がり、収まり切りそうになかった心に無遠慮に一度に入り込んできた。

「もう、お終いだ。皆殺してやる」

ぼそつとそう呟いたかと思うと、痩せた香奈枝の身体は数メートルも吹っ飛んだ。

彼女は、それきりピクリとも動かなくなり、誰かが遅れて、あつ、と言つのを皮切りに、その場の雰囲気は一気に騒然としたものになった。

だが、一番その事に驚いていたのは、信二本人だった。

香奈枝には、まだ手を触れていなかったからだ。

何が起こったのかを認識できず、手を開いたり、閉じたりを繰り返していた。

「なんだあ、神様つて、ちゃんとしたんじゃないか」

ややあつてから、何度も大袈裟にそう頷くと、信二は口角を三日月型にして、先ほど彼を辱めた男子の元へにじり寄っていった。

その表情や仕草は、とても正気の人間のものとは言えず、件の男子

は、後ずさることしか出来なかった。

「おい、よせよ。なんだよ、急に」

「何だよ、か。お前が、何なんだよ」

信二が手をかざすと、彼に対していた少年の胸が目に見える程へこみ、骨が折れる嫌な音がした。

ここに、異常は明らかとなり周りの視線は、彼の変貌への当惑から、恐怖のそれへと変わった。

金切り声を上げながら、混乱した女子が大慌てで教室の外へ逃げ出していく。

「ははっ、あっはははは、やっぱり！！！！やっぱり、俺は選ばれたんだ」

彼にとつて、これ程の快楽はなかった。自分が念じたことが、現実となり、物理的に影響を与えていく。

胸の底に積もり積もったヘドロのような悲しみを全て吐き出そうと、手当たり次第その力をぶつけていくと、その度人間の身体は面白いように彼の自由になった。

「お前もっ、いつも関係ないみたいな顔をして、む、むかついてたんだよ！」

もはや呂律も回らない言葉を恭平に投げつけ、手をかざしたその瞬間、信二は全身の穴という穴からから、黒く濁った血をどばどばと吹き出していた。

「あ、あれ？何だ、お前。ていうか、誰、そいつ？」

それから信二は糸の切れた人形のように倒れこみ、二度とは動けなくなつた。

多くの者が病院に運ばれる惨劇となったが、幸い、信二を除いては死者は出なかった。

学校は三日間休校とされ、その期間が終わった後も、マスコミが生徒に無神経なインタビューを繰り返していた。

連日のワイドショーでは、上畑信二という人間は、その名前以外は

殆ど全てが露にされたのだが、信一の使った不可思議な力については何一つとして報道されることはなかった。

「都内の、凌栄高校にてN型サイコネシスが複数確認されました」
沖田は、署長室で携帯電話を耳に押し当てていた。

「N型だっただと？それも複数？この間のことといい、あの地区はどうなつとるんだ」

声を殺して、しかし、驚きの感情を籠めて、通話の相手にそう漏らす。

「さあ？存じかねます」

「で、CLASSは？危険なのか？片方は死んだからどうでもいいが」

「片方がCLASS2、もう片方がCLASS7です」

「くつ、CLASS7だとっ！？」

「ええ、これはご存知の通り、非常に由々しき事態でありまして、こちら側としましても」

沖田は興奮のあまり、げほげほと咳き込んだ。

「CLASS7なんぞ、過去に一度計測されただけではないか。だいたい、なんでそれである学校がまだ建ってるんだ。何かの間違いないのか？」

「その可能性におきましても、考慮しなおす必要性がないとは言いませんが、現段階ではほぼ確定的かと」

「馬鹿な、そんなことがあってたまるか、馬鹿な、馬鹿な……」

「一度落ち着かれた方がいいようですね。ミスター沖田、それではまたいずれ」

上畑信二（前書き）

今回でストック打ち止めです（＾o＾）／
これからは執筆後連載となりますので、やや間隔があくこともある
かもしれませんが。

時間が取れば毎日5千字程度更新していきたいのですが、なかなか忙しい時期でもあるので、気長にお待ちを・・・スイマセン m
（——） m

上畑信一

「一体今まで何処に潜んでいたというのだ、奴らに付け入る隙を与えるわけにはいかんというのにッ」

乱暴に携帯電話を二つ折にすると、沖田は手元の資料を食い入るように読んだ後、部下に恭平を監視するように伝えた。

高宮恭平にとって、この事件は衝撃以外何者でもなかった。

彼の目の前でクラスメイトだった男が、奇怪な死を遂げた。

崩れ落ちていく上畑の目は、いつまでも爛々と恭平を睨み付けていて、否が応でもその眼差しを思い出してしまふ。

「恭平くん、ほんつとーに怪我はないのね？」

「大丈夫・・・大丈夫だよ」

「よかった。何かして欲しいことあったら言ってね、御飯食べたくなったら言ってね」

「それじゃあ、その、普通にしてくっ欲しいかな」

過剰に気を遣われるのは、あまり気持ちのいいものではなかった。

思い返せば、少年の頃も千尋は腫れ物に触るかのような態度をとる時があった。

自分が普通ではないということが、早熟に自己を知る途中でぼんやりとわかり始めていた。

認めたくない自分との激しいせめぎ合いをさらに摩擦させる、周りの人間が嫌いだった。

そして、その中に千尋が入っているということが、たまらなく悔しかった。

夕方になって少し落ち着いた頭で考えると、先日の刑事の変死事件

と今回の件がどうも無関係ではないことに気付く。

「まさか、超能力なんて、そんなのあるわけねえよ……、漫画じゃねーんだから」

そう呟いたものの、二度もそれを目の当たりにすると、心の片隅で信じ始めている自分が生まれてくる。

「俺って、頭おかしいんじゃないか……？馬鹿らしい」

薄目で横になっているうちに世界はぐらぐらと揺れ始め、恭平は眠りに落ちていった。

「高宮君、どうしてここにいるんだい？」

「上畑ッ、お前こそなんでここに？」

「なんでって……そうか、そういうことなんだね」

「……何を言ってるんだ？」

訝しげにそう尋ねても、上畑は困ったような微笑みを浮かべて言葉を濁すだけだった。

「昨日はごめん、俺、親が死んでさ、他にも色々重なってて、ヤケになってた」

優しい目をして、遠い地平線をそつと眺めている。

これが本来の彼なのかもしれないと思うと、恭平の胸は軋んだ。

「……お前が昨日使った力って、一体なんだ？」

「俺もわからないよ、急に出来たんだから。念じたら物がその通りに動いたんだ。サイコキネシスっていうんだっけ、そういうの」

「超能力なんて、ありえないよ」

「俺も、っていうか、普通の人間なら信じないだろうね。でも、出来ちゃったんだからしょうがないよ。確かにそういう力は存在する」「まさか……そんな」

上畑の素振りはこちらからかっているものではなかった。

「そのうちわかるさ。さあ……そろそろ行かないといけないみたいだ」

「待ってくれ！……一つ聞かせてくれないか？」

「超能力については俺もわからないよ？」

「違うんだ、そうじゃなくて！お前はさあ、あれでよかったのか？え、と上畑が意外そうな顔をしたから、言葉を続けていいか迷ったが、もう二度と会えないことは、うっすらわかっていて

恭平は勇気を出して口を開いた。

「俺なんかが理解できるような事じゃないと思うけど、お前が死ぬほど辛い目に遭ってたってことはわかる。

それで、お前をそんな目に遭わせた奴をさ、結局ちよつと怪我させたくらいで……って何言ってるか俺もわからなくなってきたけどさ」

「ッだから、その、殺したいくらい憎い奴がいるのにさ、なんでそんな目が出るんだらうって思って……お前は、許せたのかよ？」

「憎い奴かぁ。たくさんいたさ、最初は一人二人。気付いたら、自分以外全員憎いなんてことになってた。

だけど、結局そこまで自分を追い込んだのも自分さ、家族や仲間だった奴まで、いつのまにか憎くなっていったんだから」

「そうさせたのは、周りじゃないのか？」

「それはそうだけど、それを言っていたら何も始まらないよ。大事なもので失うことになる。って、失ってから気付いたんじゃないだけね」

「俺は……、俺はッ！……許せないと思う。周りも、自分も」

「どこで妥協するかって話になるね。突き詰めすぎると神様しか生きちゃいけないよ。」

君は妥協する自分が醜いと思うから、そうやって自分で逃げ道を塞いでいるのさ、俺もそうだった」

「妥協は、しちやいけない気がする」

「それをせずに生きていける人間なんていないよ」

「・・・」

「まあ、心配しなくても大丈夫さ、君なら俺より上手くやれるよ」

恭平は、自分はこの上畑という男には敵わないと、強く感じていた。いつか、彼のように色んなものを許しながら生きていけるだろうか。

「また、会える？」

「いつか会えるさ。その時を待っているよ」

そういうと、霧が晴れるように上畑の姿は消えていった。

辺りには虚しい波音がこだまして、その場所はまたしても恭平一人のものとなった。

蝉（前書き）

なんとか毎日更新できるように頑張ります〇）・・・*（〇〇）*
'・・・（〇

蝉

目が覚めた頃には真夜中になっていた。

すつきりしない心で電気の消えたりビングに行く、食卓の上でラップがかけられた夕飯が準備されていた。

「心配させたかな・・・」

小さな罪悪感を感じながら、それを口に運んでいく。

「この味噌汁、しょっぱいね」

ザーっと砂嵐のような音を流し続けるテレビの傍らで、千尋がソファに突っ伏して眠っている。

恭平はそつとタオルケットをかけると、千尋に背を向けて床に尻を置いた。

「なあ、千尋さん。上畑の奴どこに行っちゃったんだろっな」

それから、返事を期待せずそう呟いた。耳の奥にはまだ波の音が消えずにいた。

やがて不意に彼の頬を涙がつつた。

「あれ？どうして泣いているんだろっ？」

胸が痛いわけでも、鼻の奥がツンとするわけでもないのに涙が止まらなかつた。

きつとこれは彼が流しきれなかつた涙の代わりなのだろうと思うと、不思議にそれで納得することができた。

休校期間が明けた当日に学校に来たものは少なかったが、授業は普段のように進み、皆もいつも通り振舞うことでなんとか事件のことを忘れようとしているように感じられた。

「ねえ、高宮君？」

昼休みになつて、おずおずといった調子で進藤香奈枝が話しかけてきた。

恭平は、平常勝気な彼女がそんな態度でいるのが少し気になり、幾分か優しい声を出した。

「ん？どうしたの？」

「あのさ、その、こないだのことなんだけど……」

「うん、怪我はなかったかい？」

「それはお互い様。それで……ね？」

香奈枝は一呼吸つくと、恭平の足元を見ながら細く声を絞り出した。

「上畑を殺したのつて、アンタでしょ？」

「は？」

恭平は、それまでの気分から一転して、一拳に血が上っていくのを感じた。

散々警察に事情聴取された嫌な記憶も、苛立ちに拍車をかけた。

「何……言ってるの？俺があいつに手も触れてないのは、君だつて知ってるだろ？」

「上畑も……手を触れずに私を吹き飛ばしたわ」

「俺はあんな力使えない。言いがかりはやめてくれ」

「……私、見えたのよ」

さらに小さくなった声は、わずかに震えていたが、恭平はそれに気付かない振りをする。

「冗談じゃない、見えたつて何だよ？いい加減にしないと怒るぞ」

周りが二人を遠巻きにして、ざわめいていることも気に入らなかった。

香奈枝はというと、俯いたまま頬を紅潮させている。

恭平は、これではまるで自分が悪いみたいだと思つがここで引き下がるわけにもいかないのが現状というものだった。

「先輩、どうかしたんですか？」

香奈枝との長い沈黙を破ったのは、意外なことに倉田深奈だった。学年が違ふ彼女がどうしてここに居るのは疑問だったが、この場合は渡りに船である。

「それが……、ちよつと耳かせ」

「なんだよ、それで、何か見えたとかわけわかんないこと言い出す始末」

深奈は事情を聞くやいなや、香奈枝の名札を確認したあと、睨み付けた。

「進藤先輩、どうして恭ちゃんがそんなことするんですか？」

「それは……その」

「ふざけないでくださいッ」

校舎の外にいてもその声は聞こえたかもしれない。

当然誰もがその場所に釘付けになり、騒ぎはさらに広がったように感じられた。

恭平はそのことよりも深奈がそんな大声を出したことに驚くのに気をとられていた。

幼馴染が懐かしい愛称で自分を呼んでくれたのも少し嬉しかったが、トラブルの相手に代わりに怒鳴っているのが一学年下の女子だというところが多少情けなくはあった。

「ふ、ふざけてなんか、いないわよ」

深奈の雰囲気は圧倒されながらも、香奈枝はなんとかそう返す。

ジーワジーワと、遠くに蝉が鳴いている。

気まずい沈黙の中で、いつもよりやけに蝉の声が耳につくのは、それが人と人の下らない軋轢を馬鹿にする声だからではないか、と何故か今の恭平には感じられた。

「……とにかく、証拠もないのにいい加減なことは言わないで下さい」

少し落ち着いた声で、深奈はそう続けるが、相手を威圧するような

雰囲気は継続されていた。

わ、わかったわよ、と香奈枝が引き下がると、深奈は周りの取り巻きを気にする風もなく、教室を出て行った。

贖罪

それまで水を打ったように静まっていた教室が途端に騒然とし始める。

兎に角この場から離れなくては、と直感した。

「と、とにかく、もう変なこと言わないでくれよな」

恭平は慌てて香奈枝にそう告げてから、深奈を追いかけた。

「深奈、おい、ちょっと待ってって」

「なんですか？」

「いや、まさかお前があんな大声出すなんて、驚いたよ」

「そんなことで一々追いかけてこないで下さい」

また何処か他所他所しくなった彼女に戻っていることを知り、恭平は内心残念に思った。

昔は、刷り込みされた雛のように何処に行くにも後を追ってきて困るほど懐かれていたのだが。

「まあ、でも俺なんかの為に怒ってくれて、嬉しいよ。お前が来てくれなかったら困ってた」

深奈は、はあっと腹の底から出たような溜息をついた後

「先輩は、いつからそんな頼りなくなっただんですか」と不満げにこぼした。

「それで……」

それまで恭平に背を向けていた深奈がぐるりと向き直り、視線を合わせてきた。

「進藤先輩は、何を見たって言っていましたか？」

恭平はその口調に何故かはわからないがどこか薄ら寒いものを感じた。

「お前、ちょっと様子、変だぞ……どうしたんだよ」

「何を見たと言っていたか、聞いています」

「……わかんねえよ、見たって言っただけで、それが何かってことは聞いてないし」

「そうですか、それならいいです」

「いつ、つと顎をそらして、早足で歩き出す。」

「なんだ、あいつ……」

「大丈夫、その必要はないわ」

倉田深奈は二年の教室には帰らず、強張った表情で独り言を呟いていた。

恭平に特殊な能力がないというのは、彼女が一番よく知っていて、だからこそ、妙な噂が広まって、学校での恭平の立場が狭くなるのが嫌だった。

そんな噂を流されるくらいなら、自分がおかしな人間だと思われた方が余程ましに思える程に。

どうしても進藤が恭平の悪い噂になるようなことを言うならば、考えられるだけの実力で阻止するつもりだった。

深奈は十年前の地震で瓦礫の底から奇跡的に助け出されたただ一人の人間である。

うずもれた暗い闇の中で、彼女がひとえに想っていたのは、恭平の妹、高宮遥のことだった。

彼女が助かったのは、彼女の犠牲によるものだったからだ。

深奈の頭上に崩落してきたコンクリートの塊は、彼女を突き飛ばし、覆いかぶさるように庇った遥に当たった。

遥は、小さくお兄ちゃんと言った後、二度と言葉を口にできなかった。誰か一人だけ生き残れたのであれば、本来は自分ではなく遥だったのだと、そう思う度にどうしようもなく息苦しくなる。

凍える寒さと、飢えと、光のない世界の中で深奈が生来持ち合わせていた明るい性格は失われていった。

自分が恭平から遙を奪ってしまったという罪悪感には、いつまでも深く彼女の心に根を張っていた。

そして、恭平が自分の住む町に引越してきて、インターフォンを押した時、逃れられない贖罪の日々が過去から追いかけてきたのだと悟った。その日彼女は、自分の全てを恭平に捧げることを誓った。

少女の器量

恭平が去り、一人教室に残された香奈枝は周囲の人間にどんな噂を立てられるのだろうと内心ひどく怯えていた。

普段、誰かが何気ない話をして笑っていても、それは自分のことを笑っているのではないかと思う性格である。

もし学校に居場所がなくなったら

それでも恭平を追求せずにはいらなかったのは、彼女が信二に恋をしていたからだ。

優しい彼が好きだったし、いじめに文句を言えない彼をかわいいとさえ思っていた。

あの日、不可思議な力で並んだ机に叩きつけられても、そこに怒りは涌かず、むしろそれ程追い詰められるまで助けられなかった自分を申し訳なく思っていた。

香奈枝は途中で気絶してしまっていたから、恭平が信二を殺したのを見たというのは彼女の嘘だ。

自分の無力さに対する苛立ちと、信二が死んだことを悲しく思う誰にも告げられない痛みを、最後に信二と相對していたという恭平にぶつけたのかもしれない。

「あーあ、やっちゃった・・・」

魔が差したといえはいいのか、思いつめているうちにとんでもないことを恭平に言ってしまった。

あとで、あれは嘘だったと詫びようと思った。

そのうち、彼女と仲の良い一人が様子を伺いつつ話しかけてきた。

「ねえ、どうしたの？さっきの子、二年よね？」

「ううん、なんでもないので、ちょっと勘違いしてただけだから」

「勘違いって、あの子が？」

「いいえ、私よ、後で謝らないと」

「ふーん、まあそこには立ち入れそうにないわね、あの二年の子、怖そうだから気をつけた方がいいよ」

「好きな人に変な事言われたり、されたりしたら誰でも怒ると思うわ」

自分の胸を見つめながらそう言った。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響き、その声はかき消されていった。

チャイムとほぼ同時に恭平が教室に戻ってくる。

ひそひそという、どこからたっているのか気にするのも煩わしい音よりも、夏という季節を彩る音の方が、遙かに心地よかった。

しかし恭平はそれを気にする風でもなく、いつものように窓の外を眺めている。

やはりつまらない男だな、と感じた。

「あのさ、高宮くん？」

放課後、恭平が帰ろうとするのに合わせて、なるべく目立たないように恭平の足元のリノリウムを見ながら、彼女にしてはとても小さな声で話し掛ける。

「・・・何だよ、まだ何かあるの？」

「あの、さつきさ、見たって言ったじゃん？あれって、嘘だから・・・ごめん!!」

その言葉を聞き、恭平は暫く呆気にとられていたようだったが、香奈枝の真剣な様子を感じ取ったのか、気にしない、とだけ言って少しだけ微笑んだ。

少女の器量（後書き）

毎度、拙い文章を読んで下さってどうもありがとうございますm（

——）m

さて、今回から物語は進藤香奈枝編に移っていきます。

序盤を終え、中盤にさしかかるつかというこの頃。

段々見てくださる方も増え、一層気合を入れて執筆していききたい気持ちが強くなっています。

既にストックを吐き出している状態な上、二月まではとても忙しいのでなかなか厳しい面もありますが、できるだけ更新頻度は維持していきたいです。

疑念と行動

深奈は靴箱を出たすぐの場所で、いつものように小説を片手に恭平を待っていた。

三年生はこの時期通常授業以外にも希望すれば補習を受けることが出来た。

夏は受験の天王山と言われるだけあって、進学校でもあることから、生徒達のモチベーションは高く、自由参加とはいえ、特別な予定がなければ参加するのが普通だった。

恭平も例に漏れず補習を受けることにしており、深奈に先に帰るように言うのだが、どうしても彼女は言うことを聞かなかった。

「あれ？先輩、今日は補習を受けないんですか？」

「ああ、今日はそんな気分じゃないよ。今日はっていうか、最近ずつとだけど」

「ダメです、ちゃんと受けないと」

「って言っても・・・なあ？」

恭平が視線を送った先には、同じように下校する三年生の姿が少なくなかった。

事件のあとの休校明けすぐに補習を受ける人間が珍しいのは当然なのかもしれない。

「周りに流されています？」

ジト目でそういう深奈からは、先ほどの異常といってもいいような雰囲気は感じられなかった。

「それも正直あるけど、それより、お前に伝えたくてさ、さっきの

進藤って奴が何か見たっていうのは出任せだったらしいよ」

「出任せ!?!」

驚いて数秒固まったかと思うと、やがて安堵の表情を浮かべる。

「うん、お前がやけに気にしてたからさ、早く教えてやろうと思っ
て」

「……よかった」

「でも、意外だなあ」

恭平がそういうと、深奈は何が意外なのか、とでも言うような怪訝な顔をする。

「いやさ、お前がオカルトに興味あったなんて」

「……先輩なんて知りません」

小説を乱暴にかばんに入れると、むっとした表情で睨んできた。

何か拙いことでも言ってしまったのか、と少し慌てて恭平はフオロ
ーをいれた。

「ちゃんと補習受けるから、先に帰ってていいぞ」

「そうします!?!」

こちらを見もせずに行ってしまった。

最近のあいつはよくわからない、と恭平は可笑しい気持ちになった。

言葉の通り、深奈は先に帰ったようだった。

恭平は、陽の沈み始めた道を、緩やかに下っていった。

一人でいると、寄り道をした気分になるが、手持ちもなく真っ直
ぐに家に帰らざるをえなかった。

ぼうつとしたまま一人の道を歩き続けているうちに、段々と感覚が
薄れていく感じがした。

またか、と恭平は思った。決まって一人でいる時に起こる現象、自
動操縦である。

意識はぼんやりとしていて、まるで夢の中にいるような心地がする。忘れていたことがあったり、面倒なことがある時によくこの状態になることに彼は気付いていた。

そして、普通それらをこなすときの煩わしさなしに物事が片付いていくので、普通ではないのではないかと思いつつも

気に入った玩具を隠すかのように、この事は誰にも話していなかった。

「 待つてくれ、おい」

ふと、誰かに呼び止められていることに気付く。

放つて置いて欲しいと思いつつも、彼は応対することを決め、声の主へ振り返った。

「まったく、散々無視しやがって」

その男には見覚えがあった。

格好は多少汚らしくなっているが、堀が深く、年の割りには粗雑な言葉遣いをするのは、数日前の晩の男か。

あの時の虚ろな表情とは変わって、彼は それがいつもの彼だと感じさせるような 意志の強そうな表情をしていた。

「あの、どうかしたんですか？」

多少警戒しつつも、全くの顔見知りでないわけではないので、恭平は会話を続けることにした。

「悪いんだけどよ、ちよつと話聞かせてもらおうと思つてよ」

そついうと加藤は、懐から警察手帳を出した。

既に彼は職を辞しており、にもかかわらず自分が刑事であるかのよつに振舞うのは犯罪なのだが、彼はどうしても陵栄高校で起こつた事件について詳細な話を聞きたいと思つていた。

「おじさんつて、警察の人だったんですか!？」

「一体なんだと思つてたんだよ、まったく。まあそいつはいい、それより、こないだお前の学校で起きた事件について聞かせてくれね

えか」

「もう、警察には色々話しましたけど」

「俺は部署が違うから聞いてねえんだよ」

我ながら苦しい言い訳だな、と加藤は思ったが、ここで引き下がるわけにはいかないし、いざとなれば実力行使する準備さえあった。

あの晩、同僚が死んだ光景が今でも彼の目に焼きついている。

あれは、普通の人間に出来ることではない。

一応ありのままに報告したが、それが受け入れられるわけもなかった。

個人的に事件の裏を詳しく洗おうとしていたら、突如部署を変更するという命令が本庁直々に下された。

絶対に、裏がある

彼は、自らの保身の為に長いものに巻かれるような男ではなかった。その日のうちに辞表を叩きつけ、それからずっと刑事人生の経験を生かし、自らの足を使い入念に背後関係を調べていたが、特に情報が得られることはなかった。

まだやらねばならないことがあるのに、沈んでいく陽を止められない歯がゆさに似た焦りが、この頃の彼を支配していた。

そんな時、陵栄高校で傷害事件が起こり、犯人の男子生徒が奇妙な死を遂げるというニュースが、彼を直撃した。

生徒の中には、犯人の生徒が、何か念力のような不可思議なものを使うのを見た、という者がいた。

自分が今追っているものと、それはとても無関係には思えなかった。

非日常

人通りの少ない路地に場所を移したのち、恭平はとつとつと語りだした。

「上畑と最後に接していたのは僕です。あいつは普段からいじめられてて、誰も話しかけなくなって、とにかく限界だったんだと思います」

加藤は、真剣な顔をしてメモを走らせつつも、核心が恭平の口から飛び出すその瞬間を血に飢えた獣の如く待っていた。

知りたい事がこんなにも近くにあると思うと、俺の聞きたいのはそこじゃない、と言おうとするのを抑える押さえのに苦労するくらいだった。

「それで、電話がかかってきた後は、とても悲しそうにしていた。心が」

恭平は、幼い田舎の天井を思い返しながら、なんとか言葉を続けた。

「心が、壊れていく音を、あの時彼は聞いたんだと思う」

「心が、壊れる音だ!？」

これは、単なる比喻なのだろうか、加藤のペンを握る手は、周りの温度のせい以上に汗ばんでいた。

「はい、聞いた事、ありませんか？」

「ッ！ ないな、どんな音なんだ」

恭平は、しばらく考えた後、言葉では説明できないと前置きした後「強いているなら、キーンって感じの金属音みたいな音だと思います。そういうものが、いつまでも鳴り止んでくれない」

そんなものは、普通の人間は聞くはずもない。まず、心というのは物質ではない。

壊れるという表現でさえ比喩的であって、ガラスを砕いた時のように音がする筈はないのだ。

加藤はなんとか冷静さを保ちつつ、続きを促した。

「そんな時に、悪意を以って話かけられたら、誰でもああなると思
います」

「見境なく暴れるってことか？」

「はい、そうです」

「まあ、絶対触れられたくない時におちよくられたらキレるっての
はわからないでもねーな」

次の話が本来、加藤の狙っていた情報が出てくる筈の箇所である。
心臓が激しく脈打つのを感じながらも、彼は質問を続けた。

「上畑と最後に接していたといったな。てことは、奴はお前にも何
かしようとした筈だ。なのになんでお前は無事で、あいつが死んだ
んだ」

もう何度問われたかわからない質問に、恭平はうんざりとした表情
をする。

「俺は、別にお前が上畑を殺ったなんて思っちゃいねえ。これは他
の奴が言う建前なんかとは決して違う。俺は、ただ知りたいだけな
んだ……真実を」

あの晩、何が起こったか、何故それが揉み消そうとされたのか。

加藤の中で、今まで鼻で笑うだけだった超能力という非現実的なも
のが、確かに存在するものとして実体を持ち始めていた。

そしてそれは、テレビでやっているような、子供騙しのものではな
くて、あの晩、発砲を許可されていた銃のように人の生死すら容易
に左右できる程の脅威として。

「それが、よく覚えていないんですよね」

「頼む、聞かせてくれ」

「そんな、大声出されても、詳しく覚えてないものはしょうがない
です。これは、何かをごまかそうとしてるんじゃないやなくて、その瞬間
を思い出そうとしても、思い出せないんです、本当に」

恭平は、少し沈んだ表情をしながら、恨めしそうに言葉を続けた。

「僕だって、目の前であんなことが起こったら、ショックくらい受けます。覚えていたとしたら・・・あいつが僕を睨みながら倒れたことだけです」

「わかった、済まなかったな。・・・ところでだ、さっきの心の音っていうのは、警察に話したのか」

「おかしいと言いますね、おじさんだって警察の人でしょ？でも話したのはこれが初めてです。頭おかしいって思われちゃいますから」

「じゃあなんで、俺に話した？」

「うーん、おじさんなら笑わないって、そんな気がしたからです」
加藤は、恭平の両肩に手を置くと、半ば睨み付けるかのような視線を送った。

「いいか、今の絶対、誰にも話すんじゃないぞ」

恭平は、その勢いに吞まれ目を丸くしながらも、はい、と返した。

風鈴

「ただいま帰りました」

「こんな時間まで何やってたんだ、このポケッ！」

夕方の七時に玄関をくぐった直後に、そんな怒声が飛んでくる。

進藤香奈枝にとって、それはいつものことだった。

決して誰にも話さずにいたので、周りには知られていないことだが、彼女は孤児だった。

彼女の引き取り手は、名の知れた資産家だった。

彼女の苗字が進藤に変わった時、彼女は五歳になったばかりだった。進藤夫妻の間には元々子供はおらず、養子をとるつもりで、何度か孤児院を訪れていた。

そのうち彼女は二人に懐き、養母にそつと髪を撫でられながらウチの子になる？と聞かれたその時、胸の奥から沁み出した喜びは、そのまま彼女の頬からこぼれた。

理想的な家庭環境と違ってよかった。

不自由な事な何一つなく、専属の使用人が一人あてがわれる等絵に描いたような令嬢として育てられた。

元々身体が弱かった養母は、病に臥せりがちになり、ここ数年は起き上がることもままならない。

段々と、養父は養母の存在を無視するような態度をとるようになっていった。

事業が一時的に上手くいかなくなるといことも重なり、家の中の空気がぎしぎしと歪んでいた。

そして、ついに十六歳の「或る夜」に養父の人の良さそうな顔は仮

面だったことを知った。

それからずつと自らの非力さと、愚かさを呪い続けて生きてきた。今も、家を出た瞬間に食うに困るだろう自分に、張り裂けそうな怒りをつのらせている。

養父を適当にあしらいながら、彼女は奥の間にある和室に足を進ませる。

「ただいま、お母さん」

「……またお父さんが怒鳴っているね、お願いだから、我慢してあげてね」

「わかつてる、もう慣れたから大丈夫よ、それより何かして欲しいことある？」

「そうね、部屋に風鈴をつけて欲しいの」

「わかった、明日買ってくるね、他には？」

「あとは、カナちゃん自身のことをやってくれたら、お母さんは嬉しいわ。来年は受験なんだから……。とりあえず御飯を食べてきなさい、片谷さんが準備してくれているわ」

片谷というのは進藤家の使用人で、家事全般を任されている女である。

丁度腹の虫が鳴ったこともあり、香奈枝は食事を摂りに食卓へと向かった。

「門限を破った罰だ、飯は食わさん」

養父は目があった開口一番、そう怒鳴った。

「わかりました、失礼します」

門限を破る事になった理由は、刑事に事件のことを聞かれていたからなのだが、そんな言い訳が通じるわけはなかった。

それが意味を持った言葉として相手の耳に入ることなど期待できないからだ。

内心では殺意にも似た苛立ちが噴火していたが、彼女は表面上至極冷静に振舞えるだけの理性を持った女であり、その性質は決して争ってはいけない対象である養父との付き合いに大いに役立っていた。

夜の十一時も周る頃には空腹感が大きくなっていて、自室に引き込んだ時の勢いもどこか虚しいものに感じられる。

時間が経てば忘れるだろうと、彼女は布団を頭まで被った。

その時、部屋のドアがノックされた。

規則的で、あまり強い印象を受けないその音は、片谷のものだろう。やがて、遠慮がちに話しかける声が耳を伝う。

「失礼致します、お休みになっていたのであれば結構なのですが、御夕食をお持ちしました」

「起きてるわよ、……勝手にそんなことして大丈夫なの？」

「私はお嬢様の味方です。それに、どうせバレないので大丈夫です」

「

「はぁ……、あなたの樂觀的な性格は私には理解できないわ」

「そうかもしれないですね、お嬢様は周りを気にして今だって布団に縮こまつてるような方ですから」

片谷は、香奈枝より三つ年上なだけで、家政婦としては非常に若かった。

いい意味で相手と状況を見て態度を変えることが出来る女で、二人でいる時は使用人というより友人に近い。

だがそれも、そうした方がお互いに心地よく過ごせることを感づいたから故の態度であって、実際香奈枝はそうのようにされて何一つ不快には感じなかった。

「言うわね、でも、その通りよ、食事はとりあえず机にでも置いておいてよ」

「わかりました、じゃあまた後で食器をさげにきますね」

「ありがとう、なんかいらいらしてたのがバカみたい、助かったわ」

あんみつ

一礼の後、心配そうな顔をしたまま片谷が下がると香奈枝は薄暗い自室の天井を見上げた。

もう戻れない日々、暖かかった家族の姿がよぎる度に彼女の胸は、締め付けられるような痛みを訴える。

一度暴れ出した感情は、少々の気分転換ではどうにかなるものではない。

もう慣れたといえは慣れた痛みだったので、流石に明日にまで引きずることもないだろうと香奈枝は思う。

きつと明日になれば、大丈夫。明日になれば。

そう言い聞かせ、布団を頭まで被った。

翌日は早朝から雨が降り出し、じとじとした嫌な空気がアスファルトを覆っていた。

教室の中は不快指数100%といったところで、皆が皆、授業にもどこか集中できなかつた。

香奈枝は昨日の騒ぎを気にしていたが、一日おいてまで詮索するよくな輩はいなかつた。

「あの、昨日はほんとごめんね、私どうかしてたわ」

「ん……、もう気にしてないからいいよ」

恭平は、人見知りが激しく、仲の良い人間以外と話す時は冷たい印象を与える男だ。

それに自分で気付いてはいるのだが、治そうとも思わない。

どこか遠ざけるような雰囲気はもう一度小さく謝った後すぐすごと自分の席に戻っていく。

それでその日はおしまいだった。

同じ日などないと言うが、毎日規則的に決められたことをやっている
と時間の類似性は少なくとも出てくる。

逐一同じ行動をしたかどうか問題ではない。

一日を過ごす上でそれを新鮮に感じられるかどうかということが大
切なのだ。

だから、変化がないと断定してしまえば、その日の世界はともつ
まらないものになる。

無理にでも楽しもうという心持があれば日常が途端、夢のような世
界になる・・・ということが既に夢のようなことではないかと、
機械的にノート

をとりながら、恭平はふと思った。

時間の流れ方は同じなのに、いつから感じ方そのものが変わったの
だろう。

つまらないことでも夢中になれる心を持っていることが幸せなので
はないかという所まで伸びた思考は、惘然とした教師に問題を当て
られることで

潰えた。

「先輩、また補習サボるんですか」

「サボるってお前、元からアレは強制じゃないんだよ。いい大学に
行けないことより、今という青春の時に犠牲になるのが嫌なのさ」

「うっわ・・・」

「ちょ、何だよその反応は!？」

「・・・現実逃避」

グサッと何かが突き刺さる音が聞こえたような気がするが、ここで
引き下がっては、彼の青春の時は、勉強漬けになってしまう。

「よし、商店街に行こうな、お前あんみつ好きだろ、奢ってやるか

から見逃してくれ！」

「あんみつ……」

「そうだ、あんみつだ、何なら他にも追加していい」

「……今日はこの辺で勘弁してあげます」

かくして消えた850円によって彼は自由を手に入れた。

あんみつ(後書き)

やっと忙しさからある程度解放されました・・・。
更新頑張りたいと思います

秘密基地

無言であんみつを口に運ぶ深奈を余所目に、窓の外を眺めていると、見知った顔が店の中に入ってくるのがわかった。

香奈枝は二人に気付かず、少し離れた席に一人で座った。

声をかける理由も、その後の話題もないし、恭平はあえて知らない顔をする。

とはいえ、やはり全く気にならないという事でもないので、ちらちらと様子を伺っている、香奈枝はかばんから小包を取り出し、開封し始めた。

「・・・風鈴？」

ガラス製のものではないのか、香奈枝はそれを学生かばんに取り付けると、薄く目を閉じた。

「先輩のシスコンっぷりにも困ったものです」

「!？」

聞き捨てならないセリフが聞こえてきたので、恭平はその声の主の元へ勢い良く首を回した。

「ちょっと待て、今、何と？」

「全く、そんなことだからいけないんですよ」

「いや、断っておくが俺はシスコンでも何でもないからな？」

狭い店内でシスコンシスコンと連呼しているので、周りの視線が嫌でも集まってくる。

恭平はチラチラと視線を動かしながら、早く店を出ることばかり考えていたが、深奈は昔から食べるのが遅く、まだ半分も口に運んでいなかった。

恭平は窓の外に目をやることで、なんとか羞恥心を紛らわそうとした。

「じゃあ、先輩は遙ちゃんのこと、嫌いなんですか？」

「嫌いつて、そんなわけないだろう」

「じゃあ、好きってことじゃないですか」

深奈はあんみつをスプーンで切り取りながら、少し悪戯っぽい笑みを浮かべている。

「お前ね、そんな二者択一で片付けられることじゃないでしょうが」

「じゃあ、好きってことなのね、これは意外だわ……」

「だから、違うって……!?!?……ん？」

聞きなれない声に、首の角度を戻すと、いつの間にか香奈枝が、やや当惑した深奈の隣に座っている。

恭平はここで誤解を解いておかなければ、俺という人間の評価が終わってしまうかもしれないと割と本気で考える。

「嫌いじゃなきゃ好きって、それは暴論じゃねえか？」

「でもそういうものですよね？」

「でもそういうものよね？」

何で女というのはこんな時だけ連帯感を発揮するのだろうか、頭を抱える。

「じゃあ、嫌いじゃなきゃダメなのか？そう考えると、いかにお前らの言ってることが間違っているかわかるだろ」

「ムキになるのが怪しい」

もうここまで来ると、単に遊ばれているだけなのではないかと気付く。

「いいから早く食べえ!!」

「高宮くんって、意外にしゃべるんだね」

香奈枝に買い物に付き合っただけだと頼まれ、三人で商店街を歩き始めたとき、最初に出た言葉だ。

深奈は香奈枝に食ってかかったことを忘れたような顔をしているので、香奈枝もそれに合わせて、ぎこちない雰囲気生まれぬ綱渡

りのような立ち位置で距離を計っている。

「そうか？俺はいつもこんなものだぞ」

「いつもつまらなさそうな顔してるからさ、もっと無口で難しい人なんだと思ってた」

「そんな顔してるか？」

「自覚ないんだね。なんか、近づきにくいオーラ出してるっていうかさ」

「ええ？マジでか」

「まあ、そんなことないってもうわかったけどね」

「それで、何買うんだよ、一人じゃ選べないものって何か大切なものなのか？」

「大切……、うん、大切かも」

そんなものを大して仲が良くもない自分達が選んで良いものなのかと、二人は顔を見合わせたが、その様子に気付くこともなく香奈枝は少し先を歩いていく。

商店街を抜けて、30分も歩いた後にたどり着いた先は、昔ながらの雰囲気とする日用品店だった。

冷房の代わりに天井から扇風機が回っていて、それが展示している風鈴をいくつも揺らしている。

予め距離があると聞いていたが、いくらなんでも遠すぎだろと、機嫌が悪くなっていた二人の心は、その音色を聞くだけで静まった。

「……綺麗」

深奈が思わずそう呟いたように、都会ではなかなか味わえないような風流がそこにあって、恭平は暮らしていた田舎の、マシな部分だけを切り取って脳裏に描いていた。

「ここだけなんか別世界みたいでしょう？」

とっておきの秘密基地を自慢するような顔で、香奈枝は微笑んだ。

ともだち

「確かに、風情有りますね」

深奈は、豚の形をした蚊取り線香の器に目をやりながら答えた。

店では香を炊いているのか、和風のなんともいえない良い匂いが、店先にも漂っている。

店主が撒いた水がきらきらと光って、夏の生命力を映し出している。普段ならうんざりとする蝉の声すら、とても美しく思えた。

「それで、風鈴を買いたいんだけど、どれがいいか迷っちゃって」
風鈴ならさつき買っていたのではと口に出そうかと思っただが、それも無粋な気がして、知らないふりをすることにした。

「俺なら・・・これかな」

と恭平は、濃い青を基調としたガラスに、水草と、二匹の金魚がっいている絵柄を推した。

「先輩、センスないです」

「ぐっ・・・！ならお前はどれがいいと思うんだよ」

「これなんてどうです？」

深奈が指差したのは、淡い紫のガラスに、黄色の玉模様が控えめに施されているものだった。

「私も、それは候補にしておいたの」

と、香奈枝が同調する。

この二人は、もしかして気が合うのかもしれないなどと考えながら、ややふてくされた様子で、恭平は店の中に進んでいった。

「いらっしやい」

老いた店主は漸く来客に気付いたのか、やや声のトーンを上げて恭平を迎えた。

「何をお探ですか？」

「ええと、風鈴なんですけど」

「風鈴ねー、店先に飾ってあるやつと、まだ出してないやつがあるよ」

「そうなんですか？」

「こないだ焼いた奴を工房に置いてあるから、とってくるね」

そういうと、店主は店の奥にひっこんでしまう。

「なあ、他にもあるんだってよ」

「え？本当ですか？」

いつの間にか意気投合したのか、女二人の距離は物理的にも縮まっていた。

これがあくまで上辺だけのものなのか、そうでないのかは、男である恭平にはよくわからないのだが。

「なんで、風鈴なんか買うんだ？」

「うん、お母さんが欲しいって言ったから」

「へえ、じゃあプレゼントなんだ」

当たり前障りのない会話をこなしていると、店の中からお客さん、と呼ぶ声が聞こえる。

「これが、今から店に出す分です」

そういつて店主が見せてくれたものは、やはりどれも素晴らしい出来だった。

「店主さんのお勧めってありますか？」

「うーん、どれもこれもお勧めといえればそうなんだけど、これなんて気に入ってるよ」

それは、透明のガラスに、明るい色をした海がのせてある絵柄だった。

海の面積は大きくなく、あまり派手とはいえないが、それがかえってよいのだと店主は得意げに説明する。

「私、これ気に入りました」

香奈枝は興奮でやや赤くなつた頬をしながら、その風鈴を買つた。

「確かにそれもよかつたですけど、最初に見てたやつもよかつたですよ」

帰り道に深奈がそういうと、香奈枝は大して気にする風もなく

「だって、お母さん、海好きだから」

と嬉しそうに頬を緩めた。

「お母さんのこと好きなんだね」

「ええ、とつても。人によって色々だとは思うけど、殆どの人のお母さんは尊敬すべき存在だと思つてゐるわ」

香奈枝は、誤解を恐れず直ぐな瞳でそう続ける。

「高宮くんは、お母さんのことどう思つてゐるの？」

「あつ、俺お母さんいないからさ」

「あ……ごめん、変なこと聞いちゃつて」

「いや、気にしてないからいいよ」

深奈は気付けば一步下がつて二人のやり取りを眺めている。

同時に、彼女の感性は母が好きだという香奈枝の言葉が孕む、空虚さをぼんやりと捉えていた。

無理をしてそう思い込む為に自分に言い聞かすような、そんな表情の声だと思つた。

仮面を無理に剥がしにかかる趣味は彼女にはないので、適当に俯いて二人の後を追う。

「倉田さん、どうしたの？」

「いえ、ちよつと疲れただけですから」

「まあ、この暑さで歩き詰めはしんどかったな」

「ごめんね、ここまで付き合せちゃって、でもこうして話してみないとずつとぎくしゃくしそうで嫌だったの」

「うん、私も今日のことはよかったと思います」

「それじゃあ、帰るか」

辺りは薄暗くなっていたが、人通りの多い商店街まで戻ってきていたので、友達と遊んだテンションは下がらないまま、帰路に着くことができた。

物事が楽しく感じられるのは、自然で、かつ原始的な感情だけれど、例えば、薄暗い街を帰るとき、妙に焦った気分になるのはきっとそれが幼い頃を思い出させるからだろう。

時間に関係なく、陽が落ちたら帰らなければならぬ幼い子供は、暗闇が楽しい時間に終わりを告げるチャイムとなる。

と書かれた書物を読んだことがあり、まさにそんな感じなのかと今の気分を恭平は喻えてみる。

でもすぐにそれはこじつけど、と思った。

楽しいものはいつだって楽しい。

そう思えなければ、過去に振り返ってばかりの自分がそこにいないだけなのだからと。

夏の闇の奥へ

「ただいま、お母さん、風鈴買って来たよ」

「嬉しいわ、見せてくれる？まあ、海ね」

「うん、お母さん、海好きでしょ？」

「ありがとう、気に入ったわ」

「うん、これがいいってわかってたもの。じゃあ、早速つけておくね」

香奈枝は、風のない部屋に風鈴を吊るし、扇風機の風を調節し、音が鳴るようにした。

「……素敵」

香奈枝の母は、静かに目を閉じながら風鈴の鳴る部屋の天井を見上げている。

「……香奈枝、お父さんのことは嫌い？」

「……あんなの、お父さんなんかじゃない」

「……あんなの、お父さんなんかじゃない」

「辛いだろうけど、あの人を許してあげて」

香奈枝は、母の言葉に息を呑んだ。

自分がどんな仕打ちを受けたか、知らないとは言わせないし、現状冷遇されているのは母ではないか。

「何でそんなこと言うの？」

「あなたが知らないことがたくさんあるの」

「だったら、それが何か言ってみてよ。それもなしで許してあげてなんて、虫が良すぎるじゃない！」

「それがわかっていても、言えないこともあるのよ」

「なっ・・・何よそれ！馬鹿にしないでよ！私があいつにどんな目に遭わされたか、知ってるんでしょ！？」

香奈枝の母は、悲しそうな目をして、そのまま何も言わず、香奈枝に背を向けた。

この家で、母だけが同類だと思っていた。

彼女もまた父を憎しむことを生きる糧にしているのだと信じていた香奈枝にとって、母のこの態度は、痛烈な裏切り以外何者でもなかった。

香奈枝は、さあっと血の気が引いた顔で襖も閉めないままよろよろと部屋を出た。

「信じられない、馬鹿じゃないの・・・」

ぼそぼそと喉奥で呟く言葉の音はいつしか涙声に変わっていた。

やはり実の親でないから、こういうことになるのだと彼女は思ってしまう。

しかしもし実の親に育てられたとして理不尽な責めを受けたら、適当な別の理由をつけて彼らを批判したのだからとも思った。

結局のところ、感情が先行している。

根本にあるのは至極単純な願いだけなのに、それにもっともらしい理由をつけて回るのに躍起になっているだけなのだ。

「馬鹿だ、皆、馬鹿だ」

その晩香奈枝は机に突っ伏したまま、声を殺して呻き続けた。

夜明けの紫に染まる街を見ているうちに、感覚が麻痺したような気

分になる。

むしろ、そう思い込みたかったのかもしれない。

香奈枝は自嘲するように微笑んだあと、全身に広がるおかしな痛みを無視するように立ち上がった。

心の痛みが身体に伝わる時は、やはりとても悲しいのだろう。

おぼろげにそう感じながらも、彼女はそのまま日常に戻ることを選んだ。

そして彼女（前書き）

久しぶりの投稿です。

相変わらず人を選ぶ鬱々とした展開でございます。

そして彼女

「じゃあ、行つて来るわ」

「香奈枝ちゃん、昨日は」

「ううん、もういいの、私が間違っていたわ」

「どうしたの？急に」

「いいじゃない、今日は日直だからもう行かないと」

「ちよつと、待って。話したいことがあるの」

「私なら、大丈夫だから」

当て付けるように満面の笑みを返し家を出た後、段々と歩くペースが落ちていく。

時計は6時30分を指していた。

私が私をつまらないものと諦めることが出来たなら、どれ程楽になるのだろう。

そしてその結果どれ程大事なものを失うことになるのだろう。

言い訳をして、辛いことから目を背けるのが怖かった。

彼女には、それが正しいことだとどうしても思うことが出来なかった。

母のような狡い大人にはなりたくなかったのだ。

通学路を外れた公園のベンチに腰掛け、まだ熱し切らない風を受ける。

遠くの方から楽しそうな声が聞こえる。

どうして、こんなに一人なのだろうと思った。

「あんなことくらいで、落ち込み過ぎなのかもね」

搾り出した独り言は、都会の夏にかき消されていった。

薄い繋がりだけの友人、事件が起こらなくても恐らく永遠に片思いだった男子、思い返せば決まった会話しかしなかった母親。

他人とのそんな微妙な距離に安心していた私は、傷つくことを恐れていたが為に最も脆かったのだ。

「学校、行かないとね」

立ち上がった香奈枝の顔にはもはや憂いはなかった。

母ともっと、話をしよう。

無意識に都合の良い人という括りをしていたことを心の中で謝った後は、そこからまたやり直せるのだ
それがきつと人の強さなのだ。

通学路に戻るのと同時に、学校の方面から血相を変えて走ってきた片谷と鉢合わせた。

「お嬢様、探しました・・・よ」

ぜいぜいと息を切らす彼女の額から、汗の滴が幾筋も流れ落ちる。

彼女の顔色は蒼く、震えた唇が尋常でない何かが起こったことを明示する。

じわり、じわりと背中を撫でる嫌な感覚が香奈枝の気分を引き摺り下ろしにかかった。

耳障りな蝉の鳴き声は、どこか遠くの世界で響いているかのように現実感を失っていった。

「……どうしたの？」

「奥様が……！すぐに、屋敷へ」

香奈枝の身体は一瞬にして撃ち出された弾丸となり、その場から発射された。

視界に入るものをもかくように掻き分け、辿り着いた和室で彼女の時は止まった。

掛け布団には吐き出された血が大きな染みを作り、白く生気の抜けた枯れ木のような母が横たわっていた。

立ち尽くす彼女の脇で、淡々と事務的な作業が進められていく。

彼女はぼうつとした頭でそうした雑音をとても煩わしいと思った。

この家の中で母は隔離されていたと言ってよい。

機械的に生きるための世話はされていたが、本当の意味で寝たきりの母の相手をしていたのは香奈枝だけだった。

だから、夏なのに、こんなに冷たい。

背後で片谷が見守っているのがわかる。

それは香奈枝に対して哀憐の情を抱いているだけであって、母に対してではないこと。

それは、誰に教えられるでもなく香奈枝にはわかっていた。

誰も母の死を悲しまない。

これ程、やるせない気持ちは誰にわかるだろう。

りんりと鳴っている、あの風鈴ならわかるのだろうか。

葬儀は身内だけで行われたが母方の親戚ですら誰も弔問しなかった

ことに、香奈枝は喉奥から乾いた笑いが漏れ出すのを止められなかった。

数日たったある晩、片谷が遠慮がちに香奈枝の部屋をノックした。そのまま何も言わず静かに香奈枝の隣のソファに腰を下ろした後は彼女が何か話すのを待っている。

「気を遣ってくれて有難う。そうね、話したいこと、あるわ」
香奈枝は、サスペンスドラマのクライマックスで犯人が自白を始めるような調子で口を開き始めた。

「あの朝、お母さん私に話があるって言ってたのよ。私は私で精一杯で、とてもそんなの聞ける余裕なんてなかったし。」

あの時私は確かに、お母さんが動けないことを幸いに思ったわ。だって、距離をとってしまえば会話なんてできないんだから。

でも、それがあんなことになるなんて……。後悔するなって言う方が無理よね。きつとこれは、罰なんだ。

私がひどいことを考えたから、最後にお母さんが何を言いたかったのか、それを一生悩まないといけないようになったんだから」

一度声に出せば、これまで頭の中だけで考えていたことが一度に音となり。

音となつてしまえば、まるでそれが真実であるかのように、今の彼女には感じられた。

「そんなこと、ありません。誰のせいでもないんですから」

「いいえ、私がちゃんと聞いてさえあげていればッ！」

「未来のことなんて誰にもわかりません。お嬢様はお嬢様の、精一杯を生きてこられたのですから、もし、なんて言うてはいけません」

「御免なさい、落ち着いたと思っていただけ、やっぱり私冷静じゃないよ。今だって、留美の言ったこと、とても受け入れられない。悪いけど、出て行って」

「いえ、差し出がましい真似を致しました」

カーテンまで締め切った香奈枝の部屋では、吊るされた風鈴の音も鳴らなかった。

不意にあの涼しげな少年の顔が浮かんだ。

あの少年も、母がいないと言っていた。

もしかしたら香奈枝と同じような孤児なのかもしれないし、死に別れたのかもしれない。

とりあえず彼女の知る範囲で、今の彼女を慰められるのは、彼しかいなかった。

「失礼だつて、わかっている。あの子の傷を抉ることになるかもしれない。だけど、耐えられない。少しでいいから楽になりたい。でもそれは……」

ぶつぶつと呟き、堂々巡りを繰り返した後、香奈枝は恭平と会う為、翌日から登校することに決めた。

張り詰めた弦

高宮恭平は時々、自分の身体が自分のものでなくなるような感覚がすることがあった。

突然ぼうつとして、眠りにつくように意識が薄れていくのだ。

その状態が普通でないことはもちろんわかっていたが、それは決して不快ではなく、だから彼は誰かに打ち明けることはなかった。

驚いたような顔をした深奈に呼び止められたのは、深夜の駅だった。

「先輩、こんなところで何してるんですか」

「……え？なんでこんなところにいるんだ、俺」

「……、すっかりしてくださいよ、夢遊病なんですか？」

「いや、違うと思うけど……」

駅前の、大きな時計を街灯の光を頼りに眺めると、1時を回ったところだった。

生温い風が、辺りを漂っていた。

「お前こそ、何処行ってたんだよ」

「先輩には秘密です」

「なんだよ……まあいいけどさ」

とりとめのない会話をしながら並んで歩いていると、ぼうつとしていた頭がだんだんすつきりしていく。

意識次第で景色さえ鮮明に見えるんだな、などと感じた。

クラスメイトの進藤の身内に不幸があったことは、学校で知った。ついこの間まで、ともに話したことすらない彼女だったが、機会に恵まれ、今となっては彼の数少ない友人である。

悲しみというのは、その人間だけのものだ。

いくらわかったような顔をしたところで、他人と全く同じ感じ方など、出来るはずもないのだから。

下手な慰めは、むしろその人間をより惨めにさせることを、恭平はよく知っていた。

だから、彼女が再び登校してきた際には、きつい言い方を避ける以外は、いつも通り接するように決めていた。

上畑信二が死んで暫くしてから付きまとわれている、加藤という刑事が待ち伏せている確率がよりいっそう高まったことには辟易していた。

一度、あまり付きまとわないように文句を言ったのだが、さすがは刑事ということか、まるでこちらの悪意に怯む様子はない。

もつとも、深奈と一緒に居るときはあまり姿を現さないのだが。

一度彼がこつそり恭平に述べた言によると、「あの姉ちゃんに睨まれると寿命が縮む思いがする」とのことだった。

暑さは、少し和らいできたように感じる。

蝉の声は相変わらずうるさいが、あと1ヶ月も過ぎるとその声も聞こえなくなるかと思うと、少し寂しい気もする。

最近、あまり海の夢は見ないようになっていた。

海の夢を見たあとは、決まって言い知れない胸の痛みを覚える。

自分だけが、取り残されているような、みんな当たり前に出ることで自分だけ出来ないような、そういう気分だった。

海の夢を見ることは彼は出来る限り避けられたらいいと思っている。今のように、暫くの間見ない、ということはこれまでもよくあった。それで油断していて、突然強烈なものを突きつけられ、朝起きるなりトイレで吐いたこともあった。

「あー、今度はいつ見なきゃいけないのかな」

だから、彼が思わずそうこぼしたのも無理がないのかもしれぬ。

「例の夢ですか？」

「ああ、最近あまり見てないからいいんだけど、それならそれでぶり返しが怖いっていうかさ」

「ふーん、私にはよくわからないですけど・・・、まあなるようにしかならないですよ」

それを言っただんなことでも片付いてしまっただ、とは口に出せなかつた。

何か起こったわけでもないのに、気分を沈めておくのはいけないことだ。

恭平は気を取り直して、今日の1限目の小テストに意識を向けた。

「おはよう、高宮くん」

明るい声で話しかけてきた進藤香奈枝の目の下には大きな隈が出来ていた。

彼女が登校してきたこと、そして自分から声をかけてきたことにはまず驚いたし、同時に嬉しくもあつた。

短い期間で割り切れる筈のことではないから、彼女なりに無理をしているのだろう。

その張り詰めた糸をどうか切らないように。

誰にも、切らせないように。そう願った。

旧校舎

香奈枝と仲の良かった女子が腫れ物にさわる態度で彼女に接している。

笑ってはいるが、ふとしたときに疲れたような顔をする彼女を見ると、恭平は同情を禁じえなかった。

ある程度、傷ついた者だけがわかりあえる心の領域がある。大人になるにつれて皆それを知るが、高校生という年齢だとまだまだ未熟なものも多い。

さつきから香奈枝と話している彼女はきつとそういうタイプなのだろう。

悪気がないから、より強く他者との違い、理不尽さを感じる。胸中穏やかではないだろうと恭平は思った。

「あのさ、高宮くんちょっと・・・いいかな？」

そっけなく会話を打ち切った香奈枝がそう話しかけてきた。

「ああ、いいよ。どうした？」

「ちよつと話しにくいことだからさ、放課後時間とつてくれるとうれしいな」

「わかった、どこで待ってたらいい？」

恭平たちの教室は放課後、受験対策の補習授業に使われたり、自習する者がいたりするので話しを出来る場所ではない。

「旧校舎、でいいかな」

「まあ、あそこなら滅多なことじゃ人は来ないが・・・」

正直、旧校舎は避けたかった。

深奈に見せられた手紙の、あの歪んだ文字が実はまだ脳裏から離れ

ない。

ああ、頭が痛い

「に、お願いね」

「え？ああ、旧校舎にいればいいんだろ、すぐ行くよ」

「大丈夫？なんだか顔色が悪いみたいだけど……、無理なら全然いいよ？」

「いや、ちよつとぼつとしてただけだから」

「そう？じゃあお願い」

「あんみつ、おごつてくれるって言ったのに……」

「いや、すまん、マジで」

放課後教室まで早足でやってきた深奈が、商店街に行こうという今朝の通学中に、あんみつを奢ると言ってしまったようだ。ぼうつとしていたので、どうやら生返事をしてしまったらしい。

「外せない用事があるんだよ勘弁してくれ、このとーり」

「私とのデートすっぽかすなんて余程の用事なんでしょうね？」

デートという単語に思わずドキツとする。

「でもさ、進藤がなんか用事があるっていうんだよ、仕方ないだろ？」

「え……、進藤さん？」

「そういうことだ、ほら、帰った帰った」

「……わかった、帰る」

深奈は、空気の抜けた風船のようにしぼんでいったかと思うと、急に思いつめたような顔つきで、恭平を責めるような視線を向けた。

「……………」

「いや、あんみつなら明日奢ってやるから」

「本当は他人なんてどうでもいいくせに。そんな自分に気付いてるくせに」

「ちょ、お前、そこまでいうことないだろ、先輩傷ついたぞ!？」

「……………、すいません、帰ります」

その深奈の言葉は、逆弁がついた棘となって恭平の心に刺さり、とりあえず彼に傷ついたふりをさせた。

深奈の姿が見えなくなった後、その棘を抜こうとしたら、抜けずに痛みだけが残った。

「……………なんだよ、深奈のやつ」

日が沈むのが、早くなっている。

旧校舎近くのベンチで香奈枝と合流した後、中に入ったのだが驚くほど薄暗かった。

「ちょっと、不気味だよな」

「……………うん」

香奈枝は気にする様子もなく奥へと進んでいく。

普通女子なら足が竦んでもおかしくはないのだが。

頭が、痛い

少し前に、似たような景色があったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938j/>

サイコ・ノーヴァ

2010年10月28日03時19分発行